

和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第24~25章）

外 蘭 幸 一

まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第21巻3号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第22~23章）」に引き続くものである。「第19巻1号」（本シリーズ冒頭の号）所載の和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第1~3章）」の「まえがき」に記載したように、筆者は、すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが、もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして、これまでに第1章から第23章までを発表したので、今回はそれに続く形で、第24章と第25章を掲載する。なお、第22~27章は、拙著『ラリタヴィスタラの研究 下巻』の「第三部」に掲載したので、これらの章は『下巻』を底本とすることになる。

略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』（大正新脩大藏經 187）. Chinese Translation of the Lalitavistara.

普曜 = 『普曜經』（大正新脩大藏經 186）. A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.

『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辞典（増訂版）』（昭和32年増訂版、世界聖典刊行協会）

『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』（昭和53年、講談社）

『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年、東京書籍）

『上巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年、大東出版社）

『中巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 中巻』（2019年2月、大東出版社）

『下巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 下巻』（2019年10月、大東出版社）

BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.

BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」 は、会話文を示すために用いる。
 2. () は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
 3. [] は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
 4. < > は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
 5. 《 》 は、東大主要写本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
 6. [] は、東大主要写本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
 7. 【 】 は、諸写本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。
- * なお、第22章から第27章までの訳文の左端に付してある数字（208~484）は、『下巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

キーワード：ラリタヴィスタラ、仏伝文学、大乘仏教、混淆梵語、仏教思想

『ラリタヴィスタラ』(大遊戯経)

第24章 (トラプシャ・バツリカ品)¹

280 かくの如く、実に比丘らよ、正覺を現証したる如来は、天神たちに讃歎せられつつ、結跏趺坐を解かざるままに、眼を閉じることなく樹王(菩提樹)を瞻觀せり。禪定の喜悅を食となし²、安樂を享受しつつ、菩提樹下にて七日間³を過ごしたまえり。

それから七日を過ぎて、欲界の天子たちは百千の香水の瓶を執って、如来のもとに来たり。また、色界の天子たちも百千の香水の瓶を執って、如来のもとに近づき来たりて、菩提樹と如来に香水を注ぎかけたり。また、計数し得ざるほど[多く]の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦たちは、如来の身体より落下する、その香水を、それぞれ自分の身体に塗れり。また、無上正等覺への心を發したり。また、天子たちをはじめとする、彼らは各自の宮殿に戻って
もなお、その香水[の香⁴]を手離すことなく、他の香への愛著を起すことなかりき。また、彼らは、如来への尊敬の念を作すことによって生じたる、その歡喜と愉悅によって、無上正等覺[を求め道]より退轉せざるものと成れり。

その時、実に比丘らよ、サマンタクスマ⁵(普花)と名づける天子が、まさしくその衆会に来たり
282 てありき。彼は如来の両足に平伏し、合掌して、如来にかくの如く言えり。「世尊よ、《如来が⁶》かの三昧に專念して、七日間、結跏趺坐を解かざるままに過ごしたまえる、その三昧の名は何となすや」[と]。かくの如く言われて、比丘らよ、如来は、かの天子に、かく答えたり。「天子よ、この三昧の名はプリーティアーハーラヴユーハ⁷となし、その三昧に專念して、如来は七日間、結跏趺坐を解かざるままに過ごしたり」[と]。

それから、実に比丘らよ、サマンタクスマ天子は如来を、偈を以て⁸讃歎せり。

1. [御身の] 足は[千輻の]輪相に満ち、無垢なる蓮華の葉の[如き]千の光輝あり。
天神たちの宝冠に触れられたる足なれば、功德聚[なる御身]の両足に敬礼せん。
2. その時、かの天子は、心に歡喜しつつ、善逝(仏陀)の足を礼拝せるのち、
人・天⁹を寂靜ならしめ、疑念を除くべく、この言葉を語れり。
3. [御身は] シャーキヤ族(釈迦族)に歡喜を生ぜしめ、貪・瞋・痴を減尽せしめたり。

¹ trapuṣa と bhallika は仏陀(釈尊)から最初の授記を受ける兄弟商人の名である。方広には、この第24章は「商人蒙記品(しょうにんもうきほん)」と訳されている。

² 方広には「禪悦為食」と訳されているが、チベット訳は「禪定と歡喜を食となし」という意味の訳文になっている。

³ sapta-rātra の原意は「七夜」であるが、「七日間」の意味であり、方広にも「七日」と訳されている。

⁴ 「香」(gandha) は、チベット訳には相当訳語がなく、文脈上も不要であるから削除すべきである。

⁵ samantakusuma は「遍満たる花」の意である。方広には「普花天子」と訳されている。

⁶ 「如来が」(tathāgataḥ) は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳にはこれに相当する訳語があるので挿入すべきである。

⁷ prityāhāravvyūha は「歡喜食莊嚴」の意である。方広には「喜悅三昧為食」と訳されている。

⁸ チベット訳は「かくの如き偈を以て」という意味の訳文になっている。

⁹ 「人・天」(nāmarūṇām) とは「人間や天神たち」の意であるが、方広には「天人」と訳されており、チベット訳には「非天」(lha min) と訳されている。

〔今また〕諸々の疑問を減尽せしめて、人・天¹⁰の疑念を払拭したまわんことを。

4. 称量^{しょうりょう}しがたき一切智性^{いっさいちしやう}を正覚したるのち、十力^{じゅうりき}（仏陀）は何ゆえに、
勝者^{しょうしや}よ、菩提^{ぼだい}の座にて、七日間、結跏趺坐^{けっかふざ}を解きたまわざるや。
5. 満開^{まんかい}の百葉蓮華^{ひやくよくれんげ}の如き眼^{まなこ}を有する者^{まなこ}¹¹〔たる御身〕は、一体何を見て、七日間を、
人中^{にんちゆう}の獅子^{しし}たる者よ、清浄^{じやうじやう}なる眼を以て隣^{またた}きもせず観察したまえるや。
- 284 6. 樹王^{じゅおう}（菩提樹）の根元にありて、七日間、結跏趺坐^{けっかふざ}を解かざるところの、
この誓願^{せいがん}は御身だけのものなるや、それとも全ての弁才師子^{べんさいしし}（仏陀）のものなるや。
7. 十力尊^{じゅうりきそん}¹²〔なる御身〕の口には美妙^{みみょう}なる芳香^{ほうかう}あり、歯^{へいせい}は平斉^{へいせい}にして浄潔^{じやうけつ}なり。
いざ、真実なる語を告げたまいて、人間や天神たちに歓喜を生ぜしめたまえ。
8. 月の顔容^{かんばんせ}なせる者（仏陀）は、彼に¹³言えり。「天子よ、わが言葉を聴くがよい。
この質問^{しつもん}に対して¹⁴、われは少しばかり語るがゆえに。
9. 王が、ある場所において、親族衆^{かんじゆう}に灌頂^{かんじやう}¹⁵（即位）せしめられたる時に、
七日間、その場所を離れざるは、実に¹⁶、王の法性^{はっしやう}¹⁷なり。
10. まさに同じく、十力者^{じゅうりきしや}（仏陀）もまた、誓願^{せいがん}を成就して灌頂^{かんじやう}せられたる時、
七日間、菩提^{ぼだい}の座にありて、勝者^{しょうしや}（仏陀）たちは結跏趺坐^{けっかふざ}を解かざるなり。
11. あたかも、勇者^{ゆうしや}が余すところなく征圧したる敵衆^{てきしゆう}を観察するが如く、
仏陀もまた、菩提^{ぼだい}の座にて、摧滅^{さいめつ}したる諸煩惱^{しよぼんのう}を観察する。
12. 愚癡^{ぐち}から生じる愛欲^{あいよく}と忿怒^{ふんこ}、それらは¹⁸衆生^{しゆうじやう}にとっての敵に似て、
盗品^{たうひん}を保持せる盗賊^{たうそく}の如くなるも¹⁹、われは、それらを悉く、ここに滅除したり。
13. われは、ここに、九種の慢心^{くしゆうのまんしん}²⁰の類を滅除し、さらに憍慢^{きやうまん}を住處なきものとなせり²¹。
〔さらに〕一切の漏^{ろう}（煩惱^{ぼんごう}）を捨断^{しやだん}したれば、われに至高^{しこう}の正智^{しやうち}が生じたり。
- 286 14. ここに、有愛^{うあい}²²の行^{ぎやう}、また、かの、為すべからざることを為す無明^{むみやう}、

¹⁰ この「人・天」は、方広には上と同じく「天人」と訳されているが、チベット訳には「天・人」(lha mihi) と訳されている。チベット訳は上註9の場面で誤訳したものと思われる。

¹¹ 「満開の百葉蓮華の如き眼を有する者」の部分は、方広には「青蓮眸」と訳されている。

¹² 「十力尊」とは「十力を具えた尊者」の意であり、「仏陀」の称である。

¹³ チベット訳には「彼に」(tam) に当たる訳語はない。

¹⁴ チベット訳は「この質問への返答を」という意味の訳文になっている。

¹⁵ 「灌頂」とは「頭に水を灌ぎかけること」であるが、「もとインドの国王の即位や立太子の時行なった儀式。四大海の水をもって頂にそそぎ、祝意を表わした」とされる（『佛教語大辞典』192頁参照）。

¹⁶ チベット訳には「実に」(hi) に当たる訳語はない。

¹⁷ 「法性」(dharmatā) とは「諸法（万物）の真実のすがた；事物の本性」の意とされるが、インドの日常の用法では、単に「日常のきまり」「世のならわし」というほどの意味であった（『佛教語大辞典』1252～1253頁参照）。

¹⁸ 「下巻」の訳文には、不注意により「それらは」(te) が欠落しているので、挿入する。

¹⁹ チベット訳は「盗賊が掠奪せる財物の如きものなり」という意味の訳文になっている。

²⁰ 「九種の慢心（九慢）」とは「我勝慢（われは彼よりもすぐれていると思う）」「我等慢（われは彼に等しいと思う）」「我劣慢（われは彼よりも劣っていると思う）」「有勝我慢（他人がわれよりもすぐれていると思う）」「有等我（他人がわれに等しいと思う）」「有劣我慢（他人がわれに劣っていると思う）」「無勝我慢（他人がわれよりもすぐれていることはないと思う）」「無等我（他人がわれに等しいことはないと思う）」「無劣我慢（他人がわれよりも劣っていることはないと思う）」の九種である（『佛教語大辞典』257頁「九慢」参照）。

²¹ チベット訳は「九種の慢心と住處なき憍慢を滅除したり」という意味の訳文になっている。

²² 「有愛」(bhava-trṣṇā) とは「生存への渴愛（生存を貪ろうとする妄執）」である。これに対して「無有愛」(vibhava-trṣṇā) とは「生存が滅無となることを欲する妄執」である。有愛は「自己生存の永続を願う来世願望」であり、無有愛は「自己生存を滅し去ろうととする自殺願望」であると考えられる。

随眠根²³の網は、[われの²⁴] 聡明なる正智^{しやうち}の火によって焼尽せられたり。

15. われは、かの、「我は」「我の」とて深入して根元にまで垂下せる穢惡^{えお}の繩索^{じやうさく}、
堅牢なる蓋障^{がいしょう}の纏縛^{てんばく}を、ここに、正智^{しやうち}の刀剣^{とうけん}によって切断したり。

16. われは、久しく「我の所有」との妄惑^{もうわく}により破滅に終着する、
これらの取著^{しよじやく}ある[五]蘊^{うん}を²⁷、ここに、正智^{しやうち}によって遍知したり。

17. われは、これら二つの愚癡^{こもう}、虚妄^{びやうけん}と謬見^{こもう}、大²⁹地獄を結末とするものを、
ここに、悉く拔除し、再び生ぜしめること断じてなし。

18. われは、ここに、善根^{ぜんこん}の火焰^{かえん}をもって蓋障^{がいしょう}の稠林^{ちやうりん}を焼尽し、
またわれは、四種の顛倒^{てんどう}³⁰を余すところなく完全に焼尽したり。

19. われは、想念^{そうねん}の糸に結ばれたる、有害なる妄想^{もうそう}の蔓^{つる}を、
菩提分^{ぼだいぶん}³¹の多彩なる花鬘^{けまん}によって、ここに、残すところなく³²停頓^{ていどん}せしめたり。

20. 六十五の悪路^{あくろ}と、三十の不浄なる迷妄^{めいもう}と四十の邪惡^{じゃあく}とを、³³
われは、この菩提^{ぼだい}の座にて断除したり。

21. 十六の放逸と、十八の身体要素(十八界)と、二十五[の生存状態]³⁴の全てを、
われは、菩提^{ぼだい}の座に坐して、ここに、断除したり。

22. 二十の塵氣^{じんき}³⁵と、世間の二十八の恐怖^{こふ}³⁶とを、
われは、ここに、精進力^{しやうじんりき}と勇猛^{ゆうもう}とを駆使して、超出したり。

288 23. また、われは、ここに、仏陀の五百の咆哮^{ほうこう}³⁷を自覚^{じかく}³⁸し、
百千に達する諸法を、われは証得したり。

24. われは、九十八の随眠^{ずいめん}³⁹を、余すところなく、根の辺際^{へんざい}に至るまで、

²³「随眠根」とは「随眠(潜在的煩惱)の根」の意である。

²⁴チベット訳には「われは(～を焼尽したり)」に相当する訳語(nas)がある。

²⁵「蓋障」とは「蔽いさえぎるもの」「心をおおい、障害となるもの」の意である。

²⁶「纏縛」とは「からみしるもの」「迷いの世界に縛り、繋ぎとめるもの」の意である。

²⁷「これらの取著ある[五]蘊を」の部分は、チベット訳では「取著ある、この[五]蘊を」という意味の訳文になっている。

²⁸「二つの愚癡」とは上の第12偈に見られる「愛欲と忿怒」を指すと思われるが、方広には「二無明」と訳されている。

²⁹チベット訳には「大」(mahā)に当たる訳語はない。

³⁰「顛倒」とは「道理にそむくさかさまの見方・考え方」を指し、「一切世間の無常・苦・不浄・無我なる道理にそむき、それが常・楽・浄・我であると考えること」を「四顛倒」という。

³¹「菩提分」(bodhy-aṅga)とは「菩提に至るための七つの要件(七覚支)」を指すものと考えられる。

³²チベット訳には「残すところなく」(aśeṣā)に当たる訳語はない。

³³「六十五の悪路」「三十の迷妄」「四十の邪惡」のいずれも、内容の詳細については不明である。方広には「六十五種無明 四十不善三十垢」と訳されている。

³⁴「十六の放逸」については詳細不明であるが、「十八界」とは「六根・六境・六識を合したのもの」である。また「二十五種の生存」とは「衆生が流転輪廻する生死の世界を二十五種に分けたもの」であり、「欲界に十四有、色界に七有、無色界に四有がある」とされる(『佛教語大辞典』1045頁「二十五有」参照)。方広にも「十六放逸十八界 二十五有悉無餘」と訳されている。

³⁵「二十の塵氣」とは「二十種の随煩惱」を意味するものと考えられる(『佛教語大辞典』812頁「随煩惱」参照)。「塵氣」(rajaṣṭara)とは「塵埃の拡散」の意味であるが、方広には「重塵」と訳され、チベット訳には「煩惱の暴流」(ñon mons chu bo)と訳されている。

³⁶「世間の二十八の恐怖」については詳細不明である。方広には「二十八種世間怖」と訳されている。

³⁷「五百の咆哮」についても不明であるが、あるいは『悲華經』に説かれる「釈迦仏の五百大願」を指すものかもしれない(『佛教大辞典』1274頁「五百大願」参照)。

³⁸「下巻」には「悟得し」と訳したが、「自覚し」に訂正する。方広には「證獲」と訳されている。

³⁹「随眠」とは「潜在的煩惱(表面に現れた煩惱に対して、いまだ表面化しない煩惱)」であるが、「九十八随眠」は「九十

随煩惱の枝葉もろとも、ここに、正智の火焰によって焚焼⁴⁰したり。

25. 欲望と疑念が集起して⁴¹、邪見の水によって流下する⁴²、不浄なる岸畔のある、
渴愛の河の激流を、[われは] 正智の太陽によって涸渴せしめたり。
26. 諂曲と虚談は捨断され、誑惑・慳貪・惡意・嫉妬などの⁴³、
この⁴⁴、煩惱の荒野は伐除され、律儀の火によって焼尽せられたり。
27. かの、鬭諍の根源にして陰難なる⁴⁵惡趣に牽引する、賢聖[なる者]への誹謗の言葉は、
ここに、最勝なる正智の藥劑によって吐瀉せしめられたり。
28. われは正智と美德と三昧とを獲得して、悲泣と慟哭、憂愁と哀惜とを、
ここに、全く残すところなく、終了せしめたり。
29. われは、ここに、真實・理智・三昧を得て、暴流と拘束と[煩惱の]束縛と、
悲しみの矢と、傲慢と放逸との、一切を征服したり。
30. われは、ここに、煩惱の稠林⁴⁶にして欲念が堅く根づきたる、生存の樹々を、
正念の斧を以て、余すところなく切断し、正智の火によって焼尽したり。
31. われは、かの⁴⁷、強大なる我慢（自負心）にして三界の自在主なる邪惡なる自我を⁴⁸、
ここに、正智の劍を以て斬殺せり、インドラによる阿修羅王⁴⁹の[斬殺の]如く。
- 290 32. 三十六[種]に活動する愛網⁵⁰（渴愛の羅網）は、この菩提の座において、
強力なる智慧の劍にて残すところなく切断され、正智の火によって焚焼せられたり。
33. われは、これら、苦悩と悲しみを生起せしめる煩惱の根を、睡眠もろともに、
最勝なる智慧の鋤犁⁵¹をもって、ここに、残すところなく拔除したり。
34. われは、ここに、自性の清浄なる衆生の智慧眼を清浄ならしめ、
偉大なる正智の眼藥をもって、廣大なる愚癡の障膜を切断したり。

八使（くじゅうはっし）」とも呼ばれ、「三界の見惑に八十八使、思惑（修惑）に十使を数え、合わせて九十八使とする」説が『俱舍論』で説かれている（『佛教語大辞典』255頁「九十八使」参照）。方広には「九十八使諸睡眠」と訳されている。

⁴⁰ 「焚焼」とは「焚いて焼いてしまうこと」である。

⁴¹ 方広には「愛疑積集」と訳されている。

⁴² チベット訳は「邪見の水に満ちたる」という意味の訳文になっている。

⁴³ チベット訳は「誑惑と慳貪と嫉妬と惡意の」という意味の訳文になっており、「など」(ādyā)に当たる訳語はない。

⁴⁴ チベット訳には「この」(tam)に当たる訳語はない。

⁴⁵ 「下巻」には「困難なる」と訳したが、「陰難なる」に訂正する。

⁴⁶ 「稠林」とは「密生した森林」の意であるが、「誤った見解、煩惱のはびこっている衆生のありさまを表わす語」として用いられる（『佛教語大辞典』962頁参照）。なお、「下巻」には振り仮名を「ちょうりん」と誤記したので、「ちゅうりん」に訂正する。

⁴⁷ チベット訳には「かの」(so)に当たる訳語はない。

⁴⁸ 「邪惡なる自我を」(saṭhātma)の部分は、チベット訳では単に「惡漢を」(gyon can)という意味の訳文になっている。

⁴⁹ 「阿修羅王」(daityendra)は、方広には「修羅衆」と訳されている。

⁵⁰ jālini は jāla (網)の女性形であるが、パーリ語では「渴愛・欲縛」の意とされ、jālini-visattikāは「網のはたらきをなす執着」として「愛網」と訳されている（『佛教語大辞典』17頁「愛網」参照）。「三十六種の渴愛」の内容詳細は不明であるが、「受」(vedanā)の種類が説かれる中に「三十六受」が挙げられる場合があり、「云何が三十六過なる。依六貪著喜、依六離貪著喜、依六貪著憂、依六離貪著憂、依六貪著捨、依六離貪著捨なり。これを三十六受を説くと名づく」（『佛教大辞典』2197頁中段参照）との記載と関係があるかもしれない。

⁵¹ 「鋤犁」(lāṅgala-mukha)とは「鋤の刃」の意である。

35. ここにおいて、放縦^{マカラ}の摩竭魚⁵²なる、四大⁵³の有情^{うじょう}によって攪乱^{かくらん}せられたる、
 広大なる渴愛^{うがい}の有海⁵⁴は、われの⁵⁵正念^{しんねん}と止心^{ししん}⁵⁶との陽光^{げんこう}によって乾枯^{けんこ}せしめられたり。
36. ここにおいて、感官の材木の束にして、妄念^{わうねん}の煙^{けむり}を出しつつ烈^{はげ}しく燃える、
 情欲^{じやうよく}の大火^{たいか}を、[われは⁵⁷]解脱^{かいだつ}の河流^{かりがわ}の清涼^{せいりやう}なる水^{みづ}によって鎮火^{ちんか}せしめたり。
37. われは、味覚^{みかく}を稲妻^{いなづま}とし妄念^{わうねん}を雷鳴^{らいめい}とする随眠^{ずいめん}（潜在的煩惱^{ひらくも}）の叢雲^{そううん}を、
 ここに、精進力^{しじゆうりき}の疾風^{しやくふう}により駆逐^{くちやく}して、完全に消失^{しゆし}せしめたり⁵⁸。
38. われは、無垢^{むこ}なる正念^{しんねん}の三昧^{さんまい}を得て、心行^{しんぎやう}⁵⁹なる敵^{てき}、生存^{しんぐん}の相續^{さうじき}なる怨敵^{おんてき}⁶⁰を、
 強力^{きやうりき}なる智慧^{ちゐ}の利剣^{りけん}によって、ここに、余^あすところなく切断^{きつせん}したり。
39. ここに、かの⁶¹、[軍]旗^{いくさ}を頂き^{いただ}に掲げて、象・馬の戦車^{せんしや}を押し立てたる、
 醜惡^{しうご}なる外貌^{がいぼう}のナムチ勢^{なむちせい}の勇猛^{ゆうめい}なる軍隊^{いくさ}を、慈^{あはれ} [心]^{しん}を会得^{かいとく}して降伏^{かうふく}したり。
40. われは、五つの[感覺的]享樂^{じやうりやく}に富み、常に上妙^{じやうみやう}の情欲^{じやうよく}を有する、六感官の軍馬^{ぐんば}を、
 不淨^{ふじやう} [観]^{くわん}⁶²の三昧^{さんまい}を得て、ここに、余^あすところなく捕縛^{はくはく}したり。
41. 実にわれは、ここに、無願^{むがん}の三昧^{さんまい}⁶³を得て、
 貪愛^{どんあい}と憤怒^{ふんぬ}とによる喧嘩^{けんか}と争論^{しやうろん}との⁶⁴、残余^{しやだん}なき捨断^{しやだん}の辺際^{へんがい}に達したり。
- 292 42. ここに、[われは⁶⁵] [一切は]空^{くう}なりとの三昧^{さんまい}を得て、
 内^{ない}と外^{がい}⁶⁶との一切^{いっけつ}の妄念^{わうねん}と、妄想^{もうそう}と妄分別^{もうふんべつ}とを滅尽^{めつじん}したり。
43. われは、無相^{むさう}の三昧^{さんまい}を得て、人間^{にんげん}と天界^{てんがい}との至高^{しこう}の極^{きやく}みなる、
 一切^{いっけつ}の歡樂^{くわんらく}を、ここに、余^あすところなく捨棄^{しやき}したり。
44. [われは⁶⁷] ここに、三種^{さんしゆ}の解脱^{かいだつ} [門]^{もん}⁶⁸を得て、われは今や、智慧^{ちゐ}の力^{りき}によって、
 かの⁶⁹、一切^{いっけつ}の有^う（迷いの境界^{けいがい}）の繫縛^{けいばく}を、悉^{ことごと}く、完全に離脱^{りだつ}したり。

⁵² makara は「海の怪物の一種（恐らくは鰐または鯨）」であり、「摩竭魚」と音訳される。荻原雲来編『梵和大辞典』982頁（makara の項）参照。

⁵³ 「四大」とは「物質的要素としての地・水・火・風の四大元素」を指す。

⁵⁴ 「有海」(bhava-samudra) とは「生存の海」の意であり、「迷いの生存を海に喩えたもの」である。

⁵⁵ チベット訳には「われの」(me) に当たる訳語はない。

⁵⁶ 「止心」(samatha= samatha) とは「散乱した心をとどめ、心を一つの対象にそそぐ、静かな心の状態」である（『佛教語大辞典』607頁「奢摩他」参照）。

⁵⁷ チベット訳には「われは」に当たる訳語 (nas) がある。

⁵⁸ チベット訳は「完全に吹き散らしたり」という意味の訳文になっている。

⁵⁹ 「心行」(citta-cari) とは「心の作用」であるが、ここでは「心に起こる分別意識、妄想」を意味する。

⁶⁰ チベット訳は「生存の怨敵の相續を」という意味の訳文になっている。

⁶¹ 「かの」(sā) はチベット訳には「われは」(nas) と訳されており、梵文と合わない。

⁶² 「不淨観」とは「肉体のけがらわしさを観想して煩惱・欲望を取り除く方法。身の不淨を観じて食欲を離れる観法」である（『佛教語大辞典』1165頁参照）。

⁶³ 「無願三昧」は「三三昧（さんざんまい）」の一つである。三三昧は「空三昧（我と我所とが空であることを観ずる）」「無相三昧（空であるがゆえに、差別の相がないことを観ずる）」「無願三昧（相がないのだから何も願ひ求むべきことはないことを観ずる）」の三つをいう（『佛教語大辞典』464頁参照）。

⁶⁴ チベット訳は「貪愛と憤怒と喧嘩と争論との」という意味の訳文になっている。

⁶⁵ チベット訳には「われは」に当たる訳語 (nas) がある。

⁶⁶ 「内」は「内界としての心」、「外」は「外界の事物」を指す。「内外空（ないげくう）」とは、「内の六根と、外の六境を観ずると、両者がともに空であること」をいう（『佛教語大辞典』1031頁参照）。

⁶⁷ チベット訳には「われは」に当たる訳語 (nas) がある。

⁶⁸ 「三解脱門」とは「三三昧」の別称である。

⁶⁹ チベット訳には「かの」(tāni) に当たる訳語はない。

45. われは、ここに、因を〔正しく〕^{しょうけん}照見⁷⁰して、無常^{じようそう}に常想をなし、
苦に楽想をなし、無我に我想をなすところの、三種の因の妄想を征服したり⁷¹。
46. われは、今や、六処^{ろくしよ}⁷²を根として集起^{しゅうき}する、諸種の行為の発現の一切を、
樹王（菩提樹）の下にて、〈無常〉の打撃を以て切断したり。
47. [われは⁷³] 愚癡の冥昧に暗まされて邪見、傲慢、憤恨に満ちたる、
久しき暗黒を、ここに、正智の陽光により破って明浄ならしめたり。
48. 貪愛と情欲との摩竭魚が住み、悪見と邪念の、[また] 渴愛の波浪がある、
輪廻の大海を、われは、ここに、精進力の船により渡脱⁷⁴したり。
49. われは、それを了知すれば、貪愛・瞋恚⁷⁵・愚癡と、心の妄想とを焼くこと、
山火事の中に落下した蛾の如くなる、それ（菩提）を、ここに證知したり。
50. われは、久しく転墜⁷⁶して、実に無量の拘胝那由多もの〔多くの〕劫において
輪廻の道に煩悶せるも、ここに、[その] 熱惱を滅し、休息するを得たり⁷⁷。
- 294 51. われは、今や、世間の利益のために、一切の外道異学の達成せざる、
老・病・憂悲・苦悩を終滅せしめる、かの甘露（不死）を證知したり。
52. 渴愛より生じる〔六〕処による苦悩、〔五〕蘊による苦悩が、
もはや生起せざるところの、無畏の都城に、今、われは到達したり。
53. かの、巨大なる内なる敵の全ては、ここに〔われによって⁷⁸〕證知せられたり。
われは、それらを覚知し、焼尽して、再生の余地なきものとなせり。
54. 甘露の為に、それを目的として⁷⁹、拘胝那由多もの劫において、自分の身肉や眼や、
多くの財産を棄捨したところの、それ（正覚）が、今、われに證知せられたり。
55. 無数の過去の勝者（過去仏）によって覚知せられたる、それ〔なる正覚〕を、
われはここに證知したり。その甘美にして悦ばしき音声は諸々の世界に鳴響せり。
56. 因縁により生起する世界は空にして、心の一刹那において過ぎ去るところの
陽炎か蜃気楼⁸⁰の如し〔との〕、それ〔なる知見〕が、今、われに證知せられたり。
57. われは今や、至高の眼を全く清浄ならしめて、それによって、一切の世界を、
あたかも掌中に置かれたる樹の実⁸¹を見るが如くに〔如実に〕見る。

⁷⁰ 「照見」（darśana）とは「明らかに見ること」「見きわめること」である。なお、『下巻』には「見照」と訳したが、「照見」に訂正する。

⁷¹ 「無常に常想をなし」以下の部分は、チベット訳では「常と無常との想念、我と無我、楽と苦との、三種の因の想念に勝利したり」という意味の訳文になっているが、方広には「又我永断彼 無常作常想 於苦作楽想 無我作我想（又、我れ彼の、無常に常想を作し、苦に於て楽想を作し、無我に我想を作すを永断せり）」と訳されている。

⁷² 「六処」は「六入」とも呼ばれ、「内の六入」は「六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）」を、「外の六入」は「六境（色・声・香・味・触・法）」を指し、合わせて「十二入（十二処）」と呼ばれる。

⁷³ チベット訳には「われは」に当たる訳語（nas）がある。

⁷⁴ 「渡脱」とは「さとの彼岸に達し解脱すること」である。

⁷⁵ チベット訳には「瞋恚」（dveṣa）に当たる訳語はない。

⁷⁶ 「転墜」とは「転げ落ちること」である。

⁷⁷ viśrānta を「下巻」には「鎮めたり」と訳したが、「休息するを得たり」に訂正する。

⁷⁸ チベット訳には「われによって」に当たる訳語（nas）がある。

⁷⁹ チベット訳には「それを目的として」（yasyārthe）に相当する訳語はない。

⁸⁰ gandharva-pura（ガンダルヴァの城：乾闥婆城）とは「蜃気楼」を意味する。

⁸¹ 方広では「樹の実」に当たる部分に「菴摩勒果（あまろくか）」との訳語が当てられている。

58. われは今や、^{さんみょう}三明を獲得し、^{しゅくみょう}宿命（過去世の生存）を^{ねんそう}念想せり。
 [すなわち] 無数の^{ナユタ}那由多もの劫を、眠りより目覚めたるが如くに想起せり。
- 296 59. 天神や人間たちは逆転して念想し、その^{てんどう}顛倒によって焼かれたるも、
 われは、その顛倒もまた如実に^{ただ}正して、ここに、^{かんろう}甘露（不死）の^{だいご}醍醐を飲みめり。
60. その「甘露を得る」ために、諸々の^{じゅうりきしや}十力者が一切衆生に対する^じ慈[心]を^{しゅじゅう}修習せり。
 われは、慈[心]の力によって勝利し、まさに、その甘露の醍醐を飲みめり。
61. その「甘露を得る」ために、諸々の十力者が一切衆生に対する^ひ悲[心]を^{しゅじゅう}修習せり。
 われは、悲[心]の力によって勝利し、ここに、[その]甘露の醍醐を飲みめり。
62. その「甘露を得る」ために、諸々の十力者が一切衆生に対する^き喜[心]を^{しゅじゅう}修習せり。
 われは、喜[心]の力によって勝利し、ここに、[その]甘露の醍醐を飲みめり。
63. その「甘露を得る」ために、諸々の十力者が^{ナユタ}那由多もの劫にわたり^{しや}捨[心]を^{しゅじゅう}修習せり。
 われは、その捨[心]の力によって勝利し、ここに、[その]甘露の醍醐を飲みめり。
64. また、ガンジス河の砂よりも遥かに多くの十力者や過去の勝者なる獅子たちによって、
 かつて飲まれたところの甘露の醍醐を、われは、今ここに飲みめり。
65. 『老・死の彼岸に達せずしては^{けつ か ふ ざ}結跏趺坐を解かざるべし』との、かの言葉を
 軍勢を伴える、これなるマーラ（悪魔）の面前にて、われは宣言したり。
66. 実に、堅固にして^{しやうよう}照耀たる^{こんこう}正智の^{こんこう}金剛によって、われは^{むみょう}無明を^{さいは}摧破し、
 かくて十力者たることを得たり。それ故に、[われは] 結跏趺坐を解くべし。
67. われは^{あらかん}阿羅漢たることを得て、われの^ろ漏（煩惱）は残余なきものとなり、
 また、ナムチの軍勢も^{さいは}摧破されたり。それ故に、[われは] 結跏趺坐を解くべし。
- 298 68. ^{こがい}五蓋^{かんやう}の^{かんやう}関鎖は、われによって、今や、^{ことごと}悉く^{だは}打破せられ、
^{かつあい}渴愛の^{かづら}蔓も切断せられたり⁸³。それ故に⁸⁴、われは結跏趺坐を解くべし。」「[と]。
69. それから、かの、^{にんちゅう}人中の月なる者（仏陀）は、^{ゆうぜん}悠然として座より起ち上がり、
 莊嚴なる^{かんじよう}灌頂を受けてから⁸⁵、^{ししぎ}獅子座（玉座）に坐したまえり。
70. また、天神衆は、千もの^{ほうびよう}宝瓶より種々なる香水を注いで、
 世間の親族にして、功德の彼岸に達したる十力者を^{そうよく}澡浴せしめたり。
71. 拘胝^{こてい}那由多もの天神たちが、^{ナユタ}那由多もの^{ナユタ}アプサラス（天女）たちと共に和合して、
 四方全面から、千もの^{そう}樂器を奏して、^な比類なき^な供養を為したり。
72. かくの如く、実に、天子たちよ、因あり、縁あり、また、⁸⁶因縁ありて、
^{もろもろ}諸の勝者は菩提の座にあって、七日間、結跏趺坐を解かざるなり、と [言われる]。

かくして、実に比丘らよ、正等覺を現証したる如來は、[成仏後の] 最初の七日間を、まさに、その「成仏を得たる」座に住したり。「われは、ここに、無上なる正等覺の菩提を證得したり。わ

⁸² 「五蓋」とは「心を覆う五種の煩惱」であり、「貪欲（貪り）」「瞋恚（怒り）」「惛沈睡眠（眠りこんだような無知蒙昧）」「掉挙惡作（躁鬱の状態）」「疑（ためらい）」の五つである（『佛教語大辞典』356頁参照）。

⁸³ この箇所は、方広には「三愛牙悉除（三愛の牙悉く除けり）」と訳されている。

⁸⁴ 「それ故に」（tena）はチベット訳には「ここに」（hdir[= iha]）と訳されており、梵文と合わない。

⁸⁵ この箇所は、方広には「受諸天澡浴（諸天の澡浴を受く）」と訳されている。

⁸⁶ この部分の「縁」の原語は hetu, 「縁」の原語は pratyaya, 「因縁」の原語は nidāna である。

れは、ここに、始終なき⁸⁷生・老・死の苦悩を終滅せしめたり」と〔思念しつつ〕。

300 第二の七日間において、如来は、三千大千世界の辺際まで⁸⁸、長き経行⁸⁹の歩行をなせり。第三の七日間において、如来は^{また}隣することなく菩提の座を觀察したり。「ここにて、われは、無上なる正等覺を証得して、始終なき⁹⁰生・老・死の苦悩を終滅せしめたり」と〔思念しつつ〕。第四の七日間において、如来は、東の海から西の海の辺際まで⁹¹、〔第二の七日よりも〕短き経行の歩行をなせり。

その時、実に、マーラ（悪魔）波旬⁹²は如来のもとに來たり近づきて、如来に対して、かくの如く言えり。「世尊よ、般涅槃⁹³したまえ。善逝よ、般涅槃したまえ。今は、世尊の般涅槃すべき時なり」〔と〕。比丘らよ、かくの如く言われて、如来はマーラ波旬にかくの如く答えたり。「波旬よ、われは、わが比丘たちが大いに成長し、温順・明晰・柔善・無畏・多聞（博識）にして、〔正〕法に隨順する法を体得し、自ら師としての正智を輝かしめること⁹⁴、また、次々に發生する外道異學を〔正〕法に即して摧伏し、淨信を生ぜしめ、神變を伴う法を説くこと能わざるうちは、般涅槃せざるべし。波旬よ、世間において、われによって仏・法・僧（三宝）の系譜⁹⁵が未だ確立せられず、無量の菩薩たちが未だ無上の正等覺に授記せられざるうちは、われは般涅槃せざるべし。波旬よ、わが四衆⁹⁶が温順・柔善・明晰⁹⁷・無畏にして、神變を伴う法を説くものとならざるうちは⁹⁸、われは般涅槃せざるべし」と。

すると、その時、マーラ波旬はこの言葉を聞くや、苦悩し落胆し、悔恨に満ちて⁹⁹、一方に退き、項垂れて、杖にて地面に文字を書きつつ坐せり、「《わが¹⁰⁰》領域は〔彼によって〕超えられたり」と〔思念しつつ¹⁰¹〕。

302 実に、その時、かの¹⁰²、三名のマーラの娘たち、ラティ（樂）とアラティ（不樂）とトゥリシュナー（渴愛）¹⁰³とは、マーラ波旬に偈を以て語りかけたり。

⁸⁷ 「始終なき」（an-avara-agra）はチベット訳には「無始なる」（thog ma med pa）と訳されており、梵文と合わない。

⁸⁸ 原文 upagr̥hya は意味不明であるが、チベット訳には bar du（～の辺まで）と訳され、方広にも「爲邊際」と訳されているので、「～の辺際まで」の意とみる。

⁸⁹ 「経行」（caṅkrama）とは「食後や、疲労をおぼえたとき、坐禅して眠気を催したときなどに、身心を整えるために、一種の運動として静かに散歩する」ことである。禪宗では「さんひん」とよむ（『佛教語大辞典』235頁参照）。

⁹⁰ 上註87と同じ。

⁹¹ ここでも上註88と同じく、「辺際まで」の原文 upagr̥hya は、チベット訳には bar du（～の辺まで）と訳され、方広にも「（以大）海」爲邊際」と訳されている。

⁹² 「波旬」は pāpiyaṇa（悪しき者）の音訳であり、マーラ（悪魔）の呼称として用いられる。

⁹³ 「般涅槃」（parinirvāṇa）とは「完全なる涅槃」の意であるが、ここでは「仏陀が亡くなること（入滅）」を指す。

⁹⁴ 「自ら師としての正智を輝かしめること」の部分のチベット訳は「自ら師たることを宣言し」という意味の訳文になっている。

⁹⁵ 「系譜」（vaṃśa）はチベット訳には「名声」（sgra）と訳されており、梵文と合わない。

⁹⁶ 「四衆」とは比丘（男性出家者）・比丘尼（女性出家者）・優婆塞（男性在家信者）・優婆夷（女性在家信者）の「四種類の仏教信徒」である。

⁹⁷ チベット訳には「明晰・柔善」の順序で訳されている。

⁹⁸ チベット訳は「法を説くことができる者たちとならざるうちは」という意味の訳文になっている。

⁹⁹ チベット訳には「悔恨に満ちて」（vipratīṣṭin）に当たる訳語はない。

¹⁰⁰ 「わが」（me）は東大主要写本に欠けているが、文脈的にもチベット訳によっても挿入すべきである。

¹⁰¹ チベット訳は「～と思念したり」という意味の訳文になっている。

¹⁰² チベット訳には「かの」（tas）に当たる訳語はない。

¹⁰³ これら三人の魔女名の原語は、前から順に rati, arati, tr̥ṣṇā である。方広には単に「魔王三女」と訳されている。

73. 父よ、何ゆえに憂愁したまうや。もし、その¹⁰⁴人[の名]を告げたまうならば、
その者を¹⁰⁵、貪愛の繩索を以て纏縛し、象の如くに牽き来たらん。
牽き来たりて、さらに、その者を速やかに御身に服従せしむべし。¹⁰⁶

マーラ（悪魔）は言えり。

74¹⁰⁷、世間の阿羅漢なる善逝（仏陀）は貪愛に支配されることなし、
わが領域は完全に超越せられたり。それ故に、われの悲歎すること甚だしきなり。

それから、彼女たちは、女人の軽率さから、まだ[釈尊が]菩薩たりし時[にも示されたところ]の如来の威神力を知っていたにもかかわらず¹⁰⁸、父（マーラ）の言葉を聞かずして、[初めて]出産したばかりの女¹⁰⁹・若年の女・中年の女の姿を示現して¹¹⁰、見境もなく、如来の近くに到来したれども、如来は彼女らを意に止めざりき。さらにまた¹¹¹、彼女らを老婦に変化せしめたり。そこで、彼女らは、父のもとに帰り来たりて、かくの如く言えり。

75. 「彼は貪愛によって牽引せられることなし。わが領域は超越せられたり。
それ故に、われは甚く悲歎せり」と、父上が私らに仰せられたることは真実なりき。

76. ガウタマ（釈迦牟尼）を破滅させるために、私らが化現せしめたる容色を、
もし彼が注視したならば、それにより、彼の心臓は裂けたるべし。

304 されば、いざ父よ、私らの老婦の身形を消失せしめ[て本形に復せしめ]たまえ。
マーラ（悪魔）は言えり。

77. 仏陀の威神力以外には、[それを]なし得るところの¹¹²、そのような人を、
動くものと動かざるものとの世界（全世界）に、われは見ることなし。

¹⁰⁴ チベット訳には「その」(asau)に当たる訳語はない。

¹⁰⁵ チベット訳には「その者を」(tam)に当たる訳語はない。

¹⁰⁶ チベット訳には、この後に「かくの如き憂愁も不安も捨てたまえ。広大なる喜樂が得らるべし」という意味の一行分（4行より成る一偈の最後の行に当たる部分）が付加されている。しかし、これに相当する Samyutta Nikāya (I, p.124ff.: 南伝大蔵経第十二巻「相應部経典一」209頁)の偈も、Mv(III,p.281)の偈も、3行で一偈を成しているから、もともとこの付加部分（4行目）は原文に無かったものであろう。一般に Śloka は2行で一偈をなすが、そう見た場合、3行目が1行だけ残り、1行の不足となるので、チベット訳者は原文には無い1行を創作して付加したと思われる。レフマン校訂本は付加部分に当たるところに*印を付けて原文不明としているが、Śāntibhikṣu Śāstri (*Lalitavistara*, 1984, p.717) はチベット訳付加部分の前半だけを基に還梵した原文 (daurmanasyam upāyāsaṃ viprajahāhi yidṛṣaṃ [yī ha yā の誤植か?])「かくの如き悲しみや不安は捨てたまえ」を挿入している。

¹⁰⁷ レフマン校訂本によれば、直前の第73偈が2行と1行より成る二つの偈（第73偈と第74偈）に分かれるために、本偈は第75偈となる。しかし、本書では第73偈を3行より成る一つの偈とみるので、本偈は第74偈となる（以下、レフマン版とは偈番号がずれる）。

¹⁰⁸ 方広には「如来爲菩薩時已作妖姿擾亂菩薩。種種幻惑無能得便」（如来が菩薩たりし時、已に妖姿を作して菩薩を擾亂せしも、種種の幻惑、能く便を得ること無かりき）と訳されている。

¹⁰⁹ prasūta は「出産した」の意であり、その女性形 (prasūtā) は「[初めて]出産したばかりの女」を指す。チベット訳は「一人の息子を出産したばかりの」という意味の訳文になっている。「下巻」には「一子を出産したる女」と訳したが、「[初めて]出産したばかりの女」に訂正する。

¹¹⁰ チベット訳は「一人の息子を出産したばかりの年齢の若き姿を示現して」という意味の訳文になっているが、「方広には「一爲童女之形。一爲少婦之形。一爲中婦之形（一は童女の形と爲り、一は少婦の形と爲り、一は中婦の形と爲って）」と訳されている。

¹¹¹ チベット訳には「さらにまた」(bhūyaś ca)に当たる訳語はない。

¹¹² 「[それを]なし得るところの」の部分のチベット訳は「変現せしめることができるところの」という意味の訳文になっている。

78. 速やかに行って、[かの¹¹³] 牟尼に、自らのなせる罪過を懺悔^{さんげ}¹¹⁴せよ。

彼は、汝らの願いどおりに、もとの身形に復せしめたまわん。

そこで、彼女たちは行って、如来に謝罪せり。「世尊よ、私たちの過誤^{かご}を許したまえ。善逝よ、私たちの罪過を《許したまえ¹¹⁵》。かくも幼稚なる、かくも凡愚^{ぼんぐ}なる、かくも蒙昧^{もうまい}なる、未熟にして道理を知らざる者どもなれば、私らは世尊を冒瀆^{ぼうとく}しうると慢心したり」[と]。そこで如来は、彼女たちに偈を以て告げたり。

79. [汝らは] 爪で山を引っ掻き、齒で鉄をかじり、

頭で山をうがち、測^{はか}り難きを測らんと欲した[るも同然な]り。

[また言わく]「それ故に、娘たちよ、汝らの罪過を[われは]許すべし。それは何故^{なげ}かといえ、罪過に罪過ありと見て懺悔し、その後は律儀^{りつぎ}を守るならば、それは聖なる法と律^{そうじょう}における増上なればなり」[と]。

比丘らよ、第五の七日間において、一週間の大風雨が起りたる時、如来はムチリンダ¹¹⁶竜王の居宅に住したり。その時、実にムチリンダ竜王は、自らの居宅より出てきて、如来の身体を七重の蜷局^{とぐろ}で取り巻き¹¹⁷、傘状に広げた頭部^{あたま}で覆翳^{ふくえい}したり。「如来の身体を寒さや風が襲うことのなきように」と。また、東方からも、他の多くの竜王たちが来たりて、如来の身体を七重の蜷局で取り巻き、傘状に広げた頭部で覆翳^{ふくえい}したり。「如来の身体を寒さや風が襲うことのなきように」と。東方からと同様に、南・西・北からも竜王たちが来たりて、如来の身体を七重の蜷局で取り巻き、傘状に広げた頭部で覆翳^{ふくえい}したり。「如来の身体を寒さや風が襲うことのなきように」と。また¹¹⁸、その竜王たちの蜷局^{だんかい}の団塊は、メール山王の如く、高々とそびえ立てり。また、それらの竜王たちが、七日七夜の間に、如来の身体に密着して、彼らに生じたる¹¹⁹ところの、そのような安楽は、かつて一度も経験せざるものなりき。それから、七日を過ぎて、かの竜王たちは、風雨が去りたるを知って、如来の身体より蜷局を解き、如来の足もとに頭面^{ずめん}をつけて敬礼し、右邊三匝^{うにょうさんざう}してから、各自の宮殿に戻り行けり。ムチリンダ竜王もまた、如来の足もとに頭面をつけて敬礼し、右邊三匝してから、自分の住居に入りたり。

第六の七日間において、如来はムチリンダ[竜王]の住居よりアジャパーラ・ニヤグローダ¹²⁰樹の下へ赴きたまえり。ムチリンダ[竜王]の住居とアジャパーラ[・ニヤグローダ樹¹²¹]との間の、ナイランジャンナー河の岸边において、チャラカ派[の修行者]やパリヴラージャカ¹²²（遊行者）や、

¹¹³ チベット訳には「かの」に相当する訳語（de）がある。

¹¹⁴ 「懺悔」とは「過去に犯した罪を告白して許しを請うこと」である。

¹¹⁵ この「許したまえ」の原文 *pratigṛhñātu* は全写本に欠落しているが、チベット訳にはこれに相当する訳語があり、文脈上も必要であるから、レフマン校訂本に従ってこれを挿入する。

¹¹⁶ *mucilinda* は竜王の名であり、「目真隣陀」と音訳される。

¹¹⁷ チベット訳は「[自分の] 身体で如来の身体を七重に取り巻き」という意味の訳文になっている。

¹¹⁸ チベット訳には「また」(ca) に当たる訳語はない。

¹¹⁹ チベット訳には「彼らに生じたる」(*teṣāṃ ... āsit*) に当たる訳語はない。

¹²⁰ *Ajapāla-nyagṛidha* 樹は「山羊飼（山羊を護る？）のバンヤン（榕樹）」の意味であり、「釈尊は成道直後にこの樹の下にて説法を躊躇し、梵天の勧請を受けた」とされる（赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』、法蔵館、昭和42年、9頁参照）。

¹²¹ チベット訳には「ニヤグローダ樹」に当たる部分の訳語が挿入されている。

¹²² *caraka-parivṛājaka* は BHSD (*caraka* の項) によれば、全体で一つのセクトを意味するとも考えられるが、ここでは、チ

ヴリッダシュラーヴァカ (シヴァ派の老乞食者) やゴータマ派 [の修行者] やニルグランタ (裸形のジャイナ行者) やアージーヴィカ (邪命派の行者)¹²³ 等々が、如来を見て訊ねたり。「さても、御身ゴータマは、この七日間の時ならぬにわか雨を¹²⁴、ずっと安楽に過ごせたまいしや」[と]。

308 すると、実に比丘らよ、如来は、その時、この《ウダーナ (感興の句) を¹²⁵》唱えたまえり。

80. 法を聴くこと・見ることを悦ぶ者にとって、寂靜は安楽なり。¹²⁶

生類への自制ありて傷害せざるは、世間の安楽なり。

81. 諸の悪より超脱し、貪欲を離れることは、世間の安楽なり。

我慢 (自負心) を律すること、それこそが最高の安楽なり。

¹²⁷ 比丘らよ、如来は、生・老・病・死・憂愁・悲歎・苦惱・落胆・惑乱等により、世間が燃え《焼かれ¹²⁸》たるを見たり。そこで如来¹²⁹は、ここに、このウダーナ (感興の句) を唱えたまえり。

82. この世間は、声・触・味・色・香によって、煩悶を生じたり。

生存を恐れながらも、生存への愛着によって、なお生存を尋求せり。

310 ¹³⁰ 第七の七日において、如来はターラーヤナ¹³¹ (無花果樹) の下に住したまえり。しかして、実にその時、北国の商人にして、トラプシャとバツリカと名づける、聡明かつ利口なる、二人の兄弟が、大利益を獲得して種々なる財物を保持し、隊商の大群集と荷を満載したる五百の車とを引き連れて、南方から北方へと進み来たり。彼らにはスジャータ (善生) とキールティ¹³² (名声) と名づける、二頭の、血筋の優れたる牡牛ありき。その二頭には [運搬に] 停滞の恐れあることなかりき。他の牡牛たちが運ばざる時には、その二頭に牽かせたり。また、前方に危難ある時には、その二頭は棧に繋がれたるが如く動かざりき。また、その二頭は突棒で御されることなく、掌一杯のウトパラ花か、スマナー¹³³ の花環によって、その二頭は御されたり。[さて、その時] ターラーヤナ樹の近くの、クシーリカー¹³⁴ (乳樹) の森に住する神の威神力により、彼らの、かの荷車の全て

ベット訳 [spyod pa pa dañ / kun tu rgyu dañ] を参考に、二つのセクト名に分ける。

¹²³ これらの行者名に当たる部分の原文は vṛddhaśrāvaka gautamanirgranthājivika である。このうち vṛddhaśrāvaka は「老弟子」の意であるが「シヴァ派の老乞食者」を指し、gautama は釈尊の教えとは別の学派としての「ゴータマ派」を指す (『梵和大辞典』によれば gotama は「Nyāya 学派の祖師の名」でもある)。nirgrantha (尼捷子) は「裸体で修行するジャイナ教徒」であり、ājivika は「特殊な方法で生活する修行者の一派」で「邪命外道」と称される。方広には、これらの外道衆を全部ひっくるめて、単に「諸外道」と訳されている。

¹²⁴ チベット訳は「七日間の激しいにわか雨の、この時を」という意味の訳文になっている。

¹²⁵ 「ウダーナを」(udānaṃ) は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳にはこれに当たる訳語がある。

¹²⁶ この一行のチベット訳は「法を聴くことと見ること、寂靜を楽しむことは安楽なり」という意味の訳文になっている。

¹²⁷ 方広にはこの箇所、5行下の冒頭部分に当たる訳文「爾時世尊於第七日。至多演林中在一樹下 (爾の時世尊、第七の七日に於て、多演林中に至って、一樹の下に在り)」が挿入されている。

¹²⁸ 「焼かれ」(pradiptaṃ) は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳にはこれに当たる訳語がある。

¹²⁹ 「如来」(tathāgata) はチベット訳には「世尊」(bcom ldan ḥdas) と訳されており、梵文と合わない。

¹³⁰ この箇所から、本章の品名になっている「兄弟商人トラプシャとバツリカによる供養物語」が始まる。定方晟「二商人奉食の伝説について」(『東海大学紀要文学部 第76輯』, 2001, pp.75-118) 参照。

¹³¹ tārāyaṇa は「神聖なる無花果樹」の名である。方広には「多演 (林)」と訳されている。

¹³² これら二頭の牡牛名の原語は sujāta と kīrti である。方広には「一名善生。一號名稱」と訳されている。

¹³³ utpala は「青蓮華」であり、sumanā は「ジャスミンの一種」である。なお、「下巻」には「スマナス」と表記したが「スマナー」に訂正する。

¹³⁴ kṣīrikā は「乳液を出す樹木」の名であり、ナツメヤシの一種と思われる。kṣīri, kṣīriṇi, kṣīriṇikā などとも呼ばれる (『佛教語大辞典』605頁「差利尼迦樹」参照)。方広には「乳 [林]」と訳されている。

が変現^{へんげん}せられて、動くことなかりき。革紐^{かわひも}をはじめとする、荷車の全ての部品もまた断裂し、破摧^{はさい}したり¹³⁵。また、荷車の車輪は、轂^{こしき}の辺りまで地中に没し、あらゆる手を尽くしても、それらの荷車は動かざりき。彼らは驚き、恐怖を生じたり。「はたして、ここに如何なる原因ありや。この異変は何ごとなりや。この陸地^{くびき}にあつて荷車が停止するとは」[と]。彼らは、スジャータとキールティとの二頭の牡牛に軛^{くびき}をつけたり。されど、かの二頭は、掌一杯のウトパラ花とスマナーの花環によって御されたれども、動かざりき。彼らは、かくの如く思念せり。「必ずや、前方に何か危難ありて、そのために、これら二頭は動かざるなり」[と]。彼らは、前方に、騎馬の偵察員^{ていさつゐん}を派遣したり。騎馬の偵察員は帰り来たりて告げたり。「如何なる危難もあることなし」と。また、かの[乳樹の森の]神が自らの色身を示現して、「恐れるに及ばず」と慰安したり。かの、二頭の牡牛もまた、如来^{いま}の在すところへと荷車を牽引したり。やがて¹³⁶、彼らは、火炎の如く煌々^{こうこう}として、三十二大人相^{さんじにだいにんそう}に嚴飾せられ、昇^{しょう}って間もなき太陽の如き威光に燃え輝ける如来を見たり。また[それを]見て、彼らは驚歎^{きょうたん}の念を生じたり。「この方は、もしや梵天^{ぼんてん}がここに来たれるや。あるいは、天主帝釈^{てんしゅう}ならんや。あるいは、毘沙門天^{びしゃもんてん}ならんや。あるいは、太陽（日天）か月（月天）ならんや。あるいは、何らかの山の神か河の神ならんや」[と]。すると、如来は袈裟^{けさ}の衣^{ころも}を頭^{あたま}に示したまえり。そこで、彼らは言えり。「この方は袈裟^{けさ}を着けたれば、出家者に間違いなし。されば¹³⁷、恐れることなし」と。彼らは淨信^{じゆんしん}を抱いて、互いにかくの如く言えり。「この出家者は、まもなく食事の時間になるべし。何か[食べ物]は」あらざるや。言わく、「蜜のタルパナ^{にゅうみ}（乳糜）と¹³⁸、皮^{かわ}を剥きたる砂糖黍^{さとうきび}あり」。彼らは、蜜のタルパナと皮剥きの砂糖黍^{さとうきび}とを持って、如来の在すところへと近づき来たりて、如来の足もとに頭面^{うしやうめん}をつけて敬礼し、右邊^{うへん}三匝^{さんさう}してから、一方^{いっぽう}に立てり。一方に立って、彼らは如来に、かくの如く言えり。「世尊^{せそん}よ、我らを哀愍^{あいみん}するが故を以て、この施物^{せもつ}を納受^{のうじう}したまえ」[と]。

314 その時、実に比丘らよ、如来にかくの如き思念が生じたり。「われ若し[これを¹³⁹]両手で受け取るならば、それは実に不善なるべし。昔の如来¹⁴⁰・正等覚者^{しやうとうかくしや}たちは、一体、何を以て受納^{じゆのう}せられたりしか」[と]。[そして]「鉢^{はち}を以て」と了知したまえり。

かくして、実に比丘らよ、如来の食事の時なりと知って、まさにその刹那^{せつな}に、四方から四大天王が来たりて、四つの金の鉢^{はち}を捧げて、如来に献上したり。「世尊よ、我らを哀愍^{あいみん}するが故を以て、これら【四つ¹⁴¹】の金の鉢^{はち}を納受^{のうじう}したまえ」[と]。「それらは沙門にふさわしからず」と考えて、如来は受納^{じゆのう}せざりき。同様に、四つの銀製の、四つの琉璃製の、玻璃（水晶）製の、ムサーラガルヴァ¹⁴²（碓磈^{しやこ}）製の、瑪瑙^{めんのう}（エメラルド）製の、そして、四つの、一切の宝石より造られたる鉢^{はち}を奉持^{ほうじ}して、如来に献上したれども、「沙門にふさわしからず」と考えて、如来は受納^{じゆのう}せざりき。

¹³⁵ チベット訳には「破摧したり」（bhidyante sma ca）に相当する訳語がないから、この部分は削除すべきかもしれない。

¹³⁶ チベット訳には「やがて」（yāvat）に当たる訳語はない。

¹³⁷ 「されば」（asmād）はチベット訳には「我らは」（bdag cag）と訳されており、梵文と合わない。

¹³⁸ チベット訳は「蜜とタルパナ」という意味の訳文となっている。tarpaṇa には「滋養物；元気を恢復せしめるもの」の意があるが、「乳糜（牛乳で作った粥）」と漢訳されることが多い。

¹³⁹ チベット訳には「これを」に相当する訳語（ḥdi）がある。

¹⁴⁰ チベット訳には「如来」（tathāgataih）に当たる訳語はない。

¹⁴¹ 「四つ」（catvāri）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳にはこれに当たる訳語（bshi po）がある。

¹⁴² musāragalva は七宝の一つとして「碓磈」あるいは「琥珀」と訳される。碓磈とは「珊瑚礁に住む二枚貝（おうぎがい）」である。琥珀（こはく）は「マツ類の樹脂の化石」とされる（『ブリタニカ国際大百科事典』参照）。なお、『下巻』には「珊瑚」と補訳したが、「（碓磈）」に訂正する。

その時、実に比丘らよ、再びまた、如来にかくの如き思念が生じたり。〔同じく¹⁴³〕昔の如来・応供・正等覚者¹⁴⁴たちは、如何なる種類の鉢によって受け取りたるや〕[と]。〔そして〕「石の鉢によって」と了知したまえり。また、そのような〔石鉢を求める〕心意が如来に生じたり。

その時、実に、ヴァイシュラマナ（毘沙門）大天王は、他の三名の大天王に語りかけたり。「諸君、さても、青身天¹⁴⁵の天子たちが、まさにこれら四つの石鉢を我らに与えたり。かの時、我らはかくの如く思念せり、「我らは、これらを用いて食事すべし」と。しかるに、ヴァイローチャナ¹⁴⁶（毘盧遮那）と名づける青身天の天子、彼が我らにかくの如く告げたり。

83. 「これらの器^{うつわ}を以て食事することなかれ。
それらを奉持^{ほうじ}して、これらは¹⁴⁷塔廟^{とうびょう}なりと想念すべし。
釈迦牟尼^{しやかひに}と名づける勝者^{しょうしや}（仏陀）が出現したまうが故に、
その方に、これらの鉢を献上されよ」[と]。

84. 諸君、釈迦牟尼に器を献上すべき、
まさに、その時機が、今、到来せり。
伎楽^{ぎがく}と器楽^{おんじやう}の音声とを鳴り響かせて、
供養^なを為したるのち、鉢を奉獻^{ほうけん}すべし。

85. 彼（釈迦牟尼）は、実に、法より成る器にして不壊^{ふゑ}なり。
また、石より成る、これらの器は食事に適したり。
しかも、他の者は〔それを〕受領^{じやうりやう}するに耐えざるなり。
いざ、我らは〔それらを〕取りに赴^{おもむ}かん。

かくして、実に四大天王は、自らの一族郎党^{いちぞくろうとう}と共に、花・《薰香¹⁴⁸・》香料・花環^{ずこう}・塗香に、樂器・鼓・合唱の演奏を以て、それぞれの手にそれらの鉢を捧げ持ち、如来の在すところへと近づき来たりて、如来に供養をなしてから、それらの鉢に天界の花を満たして、如来に献上したり。

318 その時、実に比丘らよ、如来にかくの如き思念が生じたり。「さてもまた、これらの四大天王は浄信あり、好意ありて、われに四つの石鉢を献上せり。されど、われに四つもの石鉢¹⁴⁹は不要なり。とはいえ、一名のみから受け取るならば、〔他の〕三名は落胆すべし。されば、われはこれら四つの鉢を受け取って、一つの鉢に変現^{へんげん}せしむべし」[と]。

その時、実に比丘らよ、如来は右の手を伸ばして、毘沙門大天王に偈を以て告げたり。

86. 善逝^{ぜんぜい}（如来）に器を献上されよ。
汝は最上乘^{さいじやうじやう}（最もすぐれた教え）における器と成るべし。

¹⁴³「同じく」(evam) はチベット訳には相当訳語がなく、文脈上も不要であるから削除すべきである。

¹⁴⁴チベット訳には「応供・正等覚者」に相当する訳語はない。

¹⁴⁵「青身天」の原語は nilakāyika であり、方広にも「青身天」と訳されている。BHSD によれば、この天名は本經のこの箇所¹⁴⁶にしか記されておらず、詳細不明である。

¹⁴⁶vairocana は方広に「遍光」と訳されている。Vairocana には「遍く照らすもの」の意があり、「太陽神 Virocana の息子」とされる。Virocana は元来は阿修羅 (asura) の系統の神であると思われるが、Vairocana は仏教に取り入れられて「毘盧遮那仏」と成り、真言密教では「宇宙の根本仏」たる「大日如来」として崇敬される。

¹⁴⁷チベット訳には「これらは」(ete) に当たる訳語はない。

¹⁴⁸「薰香」(dhūpa) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳にはこれに相当する訳語 (bdug pa) がある。

¹⁴⁹チベット訳には「石鉢」(sailapātrāṇi) に当たる訳語はない。

われらの如き（如来）に器を献上すれば、
正念^{しょうねん}も、また覚知^{かくち}も、決して失うことなし。¹⁵⁰

それから、実に比丘らよ、如来は、哀愍^{あいみん}するが故を以て、毘沙門大天王より、その¹⁵¹鉢を受納したり。受納したるのち、また、持国^{じこく}大天王に偈を以て告げたり。

87. 如来に器を献上せるところの、
その者は、正念と智慧とを失うこと決してなし。
また、安楽^{あんらく}から安楽へと時を過ごして、
遂^{つい}には、清涼^{しょうりょう}なる境地（涅槃）を証得^{しょうとく}するに至る。

320 それから、実に比丘らよ、如来は、哀愍するが故を以て、持国大天王より、その¹⁵²鉢を受納したり。受納したるのち、また、増長^{ぞうじょう}大天王に偈を以て告げたり。

88. 心の明浄^{みょうじょう}なる如来に対して、汝は、
清浄^{しょうじょう}なる器を献上したるが故に、
汝は、速やかに、心清浄^{しんしょうじょう}となり、
天界と人界とにおいて、称揚^{しょうよう}せらるべし。

それから、実に比丘らよ、如来は、哀愍するが故を以て、増長大天王より、その¹⁵³鉢を受納したり。受納したるのち、また、広目^{こうもく}大天王に偈を以て告げたり。

89. 持戒^{かじつ}に過失なく、徳行^{とくぎょう}に過失なき、
如来に対して、過失なき器を、
過失なき心で、浄心を以て奉獻したるが故に、
汝の布施の功德は、過失なきものとなるべし。

比丘らよ、如来は、哀愍するが故を以て、広目大天王より、その¹⁵⁴鉢を受納したり。受納したるのち、また、信解力^{しんげりき}¹⁵⁵を以て〔四つの鉢を〕一つの鉢へと変現せしめたり。また、その時、このウダーナ（感興の句）を唱えたまえり。

322 90. われは、前生において、幾つもの鉢を、
綺麗^{きれい}にし、果実を満たして、布施したり。
それ故に、これら、四つの見事^{みこと}なる鉢を、
大神力^{だいじんりき}ある四天王¹⁵⁶が〔われに〕与えたり。

¹⁵⁰ この一行を、『下巻』には「正念と覚知とを失うこと、決してあるべからず」と訳したが、原文を尊重して訂正する。

¹⁵¹ チベット訳には「その」(tat) に当たる訳語はない。

¹⁵² チベット訳には「その」(tat) に当たる訳語はない。

¹⁵³ 上註152に同じ。

¹⁵⁴ 上註152に同じ。

¹⁵⁵ 「信解力」(adhimuktibala) とは「自己の心の実相を正しく理解し確信する力」の意である。

¹⁵⁶ 『下巻』には「四天王」と誤記したので、「四天王」に訂正する。

そこで、かくの如く言われる。

91. 最勝義を¹⁵⁷知見して、揺るぎなき彼（如来）は、
七日の間、最勝なる菩提樹を觀照したるのち、
更にまた、天地を六種に震動せしめたるのち、¹⁵⁸
獅子の如き歩みの人中の獅子（如来）は起ち上がりたり。
92. 象王の如く、^{あた}迤りを、^{ゆうぜん}悠然と歩きつつ、
次第に、ターラーヤナ樹の根元^{ねもと}に至りて、
メール山の如く、不動にして坐しつつ、
牟尼（如来）は、^{じに}禪定と^{しょうざんまい}諸三昧とに専心せり。
93. ^{ちやうど}丁度その時、トラプシャとバツリカとの、
兄弟二人が、商人の集団と共に、
彼らの^{にぐるま}荷車に財物を満載して、
花の満開なるサーラ樹の森に入りたり。
- 324 94. すると、大仙人（如来）の威力により、^{せつな}刹那に、
^{しんぼう}心棒¹⁵⁹の深さにまで、車輪が地中に没したり。
かくの如き、その^{ありさま}有様を彼らが見るや、
商人の集団に、大いなる恐れが生じたり。
95. 彼らは剣を持ち、矢や槍を手にして¹⁶¹、
森に鹿を「狩るか」の如く、これは何かと探索したり。
彼らは、雲から離れた千光放者^{せんこうほうしや}¹⁶²（太陽）の如く「輝」き、
秋の月に似たる^{がんぼう}顔貌の、勝者（仏陀）を見たり。¹⁶³
96. 「彼らの」^{ふんげき}奮激は収まり、^{きやうき}驕気は消え去りて、
^{ずめん}頭面をつけて敬礼し、「この方は誰か」と思念せり。
天空より、天神の言葉が発せられたり。
「この方は、実に、仏陀にして、世間に利益を与える者なり。」
97. しかも、^{ひみん}悲愍の心を有する、この御方は、
七日七夜の間、^{おんじき}飲食を摂りたまわず。
もし自らの煩悩を鎮静せんと欲するならば、
この、身心を^{しじゅう}修習せる御方に食事を捧げよ」[と]。
98. 彼らは、この優美なる声を聞いて、
勝者（仏陀）に敬礼し、また、^{うによう}右邊をなせるのち、

¹⁵⁷ チベット訳には「かの最勝義を」と訳され、「かの」に相当する訳語 (de) が挿入されている。なお、「最勝義」(paramārtha) とは「最高の真理」の意である。

¹⁵⁸ この一行を『下巻』には「天地を六種に震動させて」と訳したが、文意を勘案して訂正する。

¹⁵⁹ 「心棒」(akṣa) とは「車輪の軸となる中心の棒」である。

¹⁶⁰ チベット訳には「その」(tām) に当たる訳語はない。

¹⁶¹ チベット訳は「彼らは剣・矢・槍を手にして」という意味の訳文になっている。

¹⁶² 「千光放者」(sahasrāṃśu) とは「千の光線を発するもの」の意であり、「太陽」を指す。

¹⁶³ 本偈の下二行を『下巻』には「彼らは、秋の月の如き顔容なせる、雲から離れて千光を放つ【太陽の】如き勝者（仏陀）を見たり」と訳したが、チベット訳を参考に訂正する。

彼らは、その時、仲間の者たちと共に、歓喜の心を以て、
「勝者に食事を供養せん」との心を起こしたり。

326 実に【また¹⁶⁴】比丘らよ、その時、商人トラブシャとバツリカの【所有する】牝牛の群が^{へんきやう}辺境の村邑に住したり。而して、その時、その時間に、かの牝牛たちは^{だいこ}醍醐の乳を出したり。そこで、牧牛者たちは、その醍醐を持って、商人トラブシャとバツリカとの^い居るところに近づき来たりて、この¹⁶⁵出来事を報告したり。「ご主人様、貴方がたは^{あなた}¹⁶⁶、なにとぞ知られたし。かの¹⁶⁷【貴方がたの所有する】全ての牝牛が醍醐の乳を出したり。一体、これは何かの^{きつちやう}吉兆なりや、それとも、^{しか}然らずや」と。

そこにおいて、^{どんよく}食欲なる性質の¹⁶⁸婆羅門たちが、かくの如く言えり。「これは吉祥にあらず。婆羅門たちへの^{だいさいし}大祭祀が設けられるべし」と。

実にまた、比丘らよ、その時、前生において商人トラブシャとバツリカとの親族たりしシカンディン¹⁶⁹（孔雀）と名づける婆羅門が梵天界に再生してありき。彼は婆羅門の姿を^{けげん}化現して、かの商人たちに、偈を以て告げたり。

99. ^{おうしやく}往昔、汝らに誓願ありき。「菩提を証得したる如来は、
我らの^{せじき}施食を受用してから、法輪を転じたまわんことを」[との]

100. 今や、かの誓願は成就したり。菩提を証得したる如来あり。
彼に食事を献上せよ。[それを]食してのち、[法]輪を転じたまわん。

101. 汝らの牝牛が^{だいこ}醍醐の乳を出せるは甚だ吉祥にしてよき運勢なり。
これは、かの偉大なる仙人（如来）の^{ふくごう}福業¹⁷⁰による威神力なり。

328 102. かくの如く商人たちを鼓舞したるのち、シカンディンは^{じやうしやう}住處へと戻りゆけり。
トラブシャをはじめとする者たちは、みな、心に歓喜を生じたり。

103. 実に、千頭の牝牛の出したる、ある限りの乳の、
それらを、^{しやうしやう}残らず収集して、
その上から【凝固した】^{せいぶん}精分を採り集め、¹⁷¹

彼らは、敬意をこめて、食物を用意したり。

104. ^{いち}一バラ¹⁷²のみにても、百千【金】の価値のある、
チャンダ¹⁷³と名づける、宝石製の鉢（器）ありき。

¹⁶⁴ 幾つかの写本によれば、この箇所「また」(punar)を挿入すべきであるが、チベット訳にはこれに当たる訳語はない。

¹⁶⁵ 「この」(imāṃ)はチベット訳には「彼らは」(de dag gis)と訳されており、梵文と合わない。

¹⁶⁶ チベット訳は「貴方がたの（牝牛の全てが）」という意味の訳文になっている。

¹⁶⁷ チベット訳には「かの」(tāḥ)に当たる訳語はない。

¹⁶⁸ 「食欲なる性質の」(lolupajātyā)のチベット訳は「施物を欲しがる性質を有する」という意味の訳文になっている。

¹⁶⁹ śikhaṇḍinは「冠毛のある」「孔雀」の意味であるが、方広には単に「商主遠祖」と訳されている。

¹⁷⁰ 「福業」(puṇya-karman)とは「幸福をもたらす善行」の意である。【下巻】には「福德の業」と訳したが「福業」に訂正する。

¹⁷¹ この箇所に該当する部分として、方広には「取醍醐選上粳米煮以爲糜（醍醐を取って上の粳米を選び、煮て以て糜と爲し）」との訳文が見られる。

¹⁷² 「バラ」(pala)は重量の単位であり、通常「両」と漢訳される。

¹⁷³ レフマン版は、この鉢名をcandraと校訂しているが、写本とチベット訳とを参考に総合的に判断すればcandaと読むべきであると思われる。方広には「栴檀之鉢」と訳されているが、「栴檀」はcandanaの音写である。

[それを] きれいに清め、明浄なるものとなして、
食物を器の縁いっばいにまで満たしたり。

105. 蜜と、また宝石の鉢とを持って、¹⁷⁴
ターラーヤナ樹の下に到りて、師（如来）に「言わく」
「尊者よ、受納して、我らを饒益¹⁷⁵されたし。
この、上妙^{じょうみょう}の食物を食したまえ」[と]。
106. 二人の兄弟を哀愍^{あいみん}するが故に、
また、「彼らが」前世に菩提心^{おこ}を発したることを知って、
師（如来）は受納して、食したまえり。
食したるのち、鉢を空中に向けて投げたり。
330 107. すると、実に、スブラフマン¹⁷⁶（善梵）と名づける天子ありて、
その者が、かの、最勝なる宝石の鉢^{つか}を掴めり。
今でもなお、彼は、それを、梵天界において、
同胞なる他の天神たちと共に、供養せり。

また、実に如来は、その時、彼らトラブシャとバツリカとの二商人を、次のように歓喜せしめたり。

108. 天の祝福が諸方において「汝らに」吉祥をもたらし、また、目的を成就せしめ、
汝らに諸々の利益を授けんことを。万事が速やかに吉とならんことを。
109. 汝らの¹⁷⁷右手に吉祥あれ、汝らの¹⁷⁸左にもまた吉祥あれ。
汝らの¹⁷⁹一切の身体肢分に吉祥あれ。頭上に花鬘^{けまん}のあるが如く。
110. 財を求めて十方に赴く商人たちに、大なる利得が得られ、
また、それらは安楽を生むものとならんことを。
111. 何らかの目的で何かを求めて、東方に赴くならば、
その方向にあるところの諸星宿^{しよせいしよく}が、汝らを守護せんことを。
112. クリッティカー、ローヒニー、また、ムリガ[シラス]、アールドラー、プナルヴァス、
プシュヤ、また同じくアシュレーシャー¹⁸⁰という、これら[の星宿の方処]は東方なり¹⁸¹。
113. 以上¹⁸²、これらの七星宿は、世間の保護者として名声を馳せ、
東方に住すると説かれたり。[それらが汝らを¹⁸³一切処において守護せんことを。
332 114. それらの[星宿の]主君なる王はドゥリタラーシュトラ（持国天）と呼ばれたり。

¹⁷⁴ 方広には「和好香蜜。盛以梅檀之鉢（好香の蜜を和し、盛るに梅檀の鉢を以てし）」と訳されている。

¹⁷⁵ 「饒益」とは「(人々に) 利益を与えること」である（『佛教語大辞典』1068頁参照）。

¹⁷⁶ subrahman は「善き梵天」の意。方広にも「善梵」と訳されている。

¹⁷⁷ チベット訳には「汝らの」(vo) に当たる訳語はない。

¹⁷⁸ 上註177と同じ。

¹⁷⁹ 上註177と同じ。

¹⁸⁰ これらの星宿名の原語は、順次 kṛttikā, rohiṇi, mṛga(sīras), ārdra, punarvasu, puṣya, aśleṣā である。

¹⁸¹ チベット訳は「これらが東方[の星宿]なり」という意味の訳文になっている。

¹⁸² チベット訳には「以上」(iti) に当たる訳語はない。

¹⁸³ チベット訳には「それらが汝らを」に相当する訳語 (de dag khyed la) がある。

一切の乾闥婆^{ガンダルヴァ}の主なる、彼が、スーリヤ（太陽）と共に「汝らを」守護せんことを。

115¹⁸⁴、また彼には多くの息子ありて、[みな] 同じ名前で、聡明^{そうめい}なり。

インドラと名づけ、総勢91名にして、大力^{だいき}を有する。

彼らもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。

116. また、東方の領域に八名の天の童女^{どうによ}あり。[即ち] ジャヤンティー、

ヴィジャヤンティー、シッダールター、アパラージター、

117. ナンドーツター、ナンディセーナー、ナンディニー、ナンディヴァルディニー¹⁸⁵なり。

彼女らも、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。

118¹⁸⁶、また、東方の領域には、チャーパーラ¹⁸⁷と名づける塔廟^{とうびょう}あり。

諸々の勝者^{しょうしや}、阿羅漢^{あらかん}、保護者¹⁸⁸が住すると知られたり。

それもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。

119. [その] 方角^{ほうかく}において汝らに平安あれ。汝らに災厄^{さいやく}の来ることなかれ。

一切の天神に保護されて、諸々の財物を獲得して戻り来たれ。

120. 何らかの仕事で、何かを求めて、南方に赴くならば、

その方向にあるところの諸星宿^{しよせいしゆく}が、汝らを守護せんことを。

121. マガーと、二つのパールグニー¹⁸⁹と、ハスター、そしてチトラ¹⁹⁰が第五にして、

スバーティとヴィシャーカー¹⁹¹、これら[の星宿^{ほうしよ}の方処]は南方なり¹⁹¹。

122. 以上¹⁹²、これらの七星宿は、世間の保護者として名声を馳せ、

南方に住すると説かれたり。それらが汝らを、万事において守護せんことを。

334 123. それらの[星宿¹⁹³]主君なる王はヴィルーダカ（増長天）と呼ばれ、

一切の鳩槃荼^{クンバーンダ}の主なり。[彼が¹⁹³] ヤマ（夜摩天）と共に「汝らを」守護せんことを。

124¹⁹⁴、また彼には多くの息子ありて、[みな] 同じ名前で、聡明なり。

インドラと名づけ、総勢91名にして、大力を有する。

彼らもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。

125. 南方の領域に八名の天の童女あり。[即ち] シュリヤーマティー、

ヤシャマティー、ヤシャプラープター、ヤショーダラー、

¹⁸⁴ この偈は3行で一偈を成している。

¹⁸⁵ これらの童女名¹⁸⁵の原語は、順次 *jayanti*, *vijayanti*, *siddhārthā*, *aparājita*, *nandottarā*, *nandisenā*, *nandini*, *nandivardhini* である。最後の童女名については諸写本間で混乱が見られ、レフマン校訂本は *nandavardhani* と校訂しているが、本書では写本 T3（及び N4）を参考に *nandivardhini* と校訂する。

¹⁸⁶ この偈も3行で一偈を成している。

¹⁸⁷ *cāpāla* は、BHSD によれば、*Vaiśālī*（毘舍離）の近くにあった塔廟の名である。

¹⁸⁸ チベット訳は「勝者、保護者、阿羅漢」の順となっている。

¹⁸⁹ 「二つのパールグニー」(*dvau phālgunīyau*) のチベット訳は「前パールグニー (*pūrva-phālgunī*) と後パールグニー (*uttara-phālgunī*)」という意味の訳文になっている。*pūrva-phālgunī* と *uttara-phālgunī* はいずれも「二十八宿」の一つであり、前者は「張宿」、後者は「翼宿」と漢訳される（『佛教大辞典』4039頁「二十八宿」参照）。

¹⁹⁰ これらの星宿名の原語は、順次 *maghā*, (*pūrva- & uttara-*)*phālgunī*, *hastā*, *citrā*, *svāti*, *visākhā* である。

¹⁹¹ チベット訳は「これらが南方[の星宿]なり」という意味の訳文になっている。

¹⁹² チベット訳には「以上」(*iti*) に当たる訳語はない。

¹⁹³ チベット訳には「彼が」に相当する訳語 (*de ni*) がある。

¹⁹⁴ この偈も3行で一偈を成している。

126. スウッティター、スプラタマー、スプラブッダー、スカーヴァハー¹⁹⁵なり。
彼女らも、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
- 127¹⁹⁶. 南方の領域に、パドゥマ（蓮華）と名づける塔廟あり。
常に威光によって輝き、常に一切を照らせり。
それもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
128. [その] 方角において汝らに平安あれ。汝らに災厄の来ることなかれ。
一切の天神に保護されて、諸々の財物を獲得して戻り来たれ。
129. 何らかの仕事で、何かを求めて、西方に赴くならば、
その方向にあるところの諸星宿が、汝らを守護せんことを。
130. アヌラーダーとジュエーシュター、また、勇猛果敢なるムーラー、
二つのアーシャーダー¹⁹⁷とアビジット、そして、シュラヴァナー¹⁹⁸が第七なり。
131. 以上¹⁹⁹、これらの七星宿は、世間の保護者として名声を馳せ、
西方に住すると説かれたり。それらが汝らを、常に守護せんことを。
- 336 132. それらの主君なる王、それをヴィールパークシャ（広目天）と〔人々は〕知る。
一切の竜の主なる、《^{ナーガ}彼が²⁰⁰》ヴァルナ（水天）と共に〔汝らを〕守護せんことを。
- 133²⁰¹. また彼には多くの息子ありて、〔みな〕同じ名前で、聡明なり。
インドラと名づけ、総勢91名にして、大力を有する。
彼らもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
134. 西方²⁰²の領域に八名の天の童女あり。〔即ち〕アランブシャー、
ミシュラケーシー²⁰³、プンダリーカー、また、アルナー、
135. エーカーナンシャー、ナヴァミカー、シーター²⁰⁴、またクリシュナーなるドラウパディー²⁰⁵、
彼女らも、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。

¹⁹⁵ これらの童女名の原語は、順次 śriyāmatī, yaśamatī, yaśapṛāptā, yaśodharā, su-utthitā, supṛathamā, suprabuddhā, sukhā-vahā である。

¹⁹⁶ この偈も3行で一偈を成している。

¹⁹⁷ 「二つのアーシャーダー」(dvāv āśāḍhe) のチベット訳は「前アーシャーダー (pūrvāśāḍhā), 後アーシャーダー (uttarāśāḍhā)」という意味の訳文になっている。pūrvāśāḍhā と uttarāśāḍhā はいずれも「二十八宿」の一つであり、前者は「箕宿」、後者は「斗宿」と漢訳される（『佛教大辞典』4039頁「二十八宿」参照）。

¹⁹⁸ これらの星宿名の原語は、順次 anurādhā, jyeṣṭhā, mūlā, (pūrva- & uttara-)jāṣāḍhā, abhijit, śravaṇā である。

¹⁹⁹ チベット訳には「以上」(iti) に当たる訳語はない。

²⁰⁰ 「彼が」(sa) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²⁰¹ この偈も3行で一偈を成している。

²⁰² 「下巻」には、不注意により「南方」と誤記したので、「西方」に訂正する。

²⁰³ チベット訳では「アランブシャー、ミシュラケーシー」(alambuṣā miśrakeśi) は一名の呼称として結合され、「多彩なる髪のアランブシャー」という意味の訳文になっている。

²⁰⁴ sitā は、チベット訳 (rol) によれば līlā と読むべきであるが、写本の支持がない。

²⁰⁵ これらの童女名の原語は、順次 alambuṣā, miśrakeśi, puṇḍarikā, aruṇā, ekānamśā, navamikā, sitā, kṛṣṇā(draupadī) である。このうち ekānamśā は、レフマン校訂本には ekādaśā と校訂されている。また、最後の kṛṣṇā は、マハーバーラタでは draupadī (あるいは durgā 女神) の呼称とされているので、「クリシュナーなるドラウパディー」と訳したが、チベット訳では「クリシュナー」と「ドラウパディー」を分離して二人の名としており、Mv の当該箇所 (III, p.308, line 9) では「黒 (kṛṣṇa) と白 (śukra) の draupadī」とも見なうる (cf. BHSD, ?Draupadī)。なお、平岡聡『ブッダの大いなる物語』(「下巻」397頁) には kṛṣṇā, śukrā, draupadī がそれぞれ別の天女名として訳されている。

- 136²⁰⁶. 西方の領域にアスタンガ²⁰⁷（日没）と名づける山あり。
 [その山に] 月と太陽が懸かるとも沈むとも、汝らに利益を与うべし。
 それもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
137. [その] 方角において汝らに平安あれ。汝らに災厄の来ることなかれ。
 一切の天神に保護されて、諸々の財物を獲得して戻り来たれ。
138. 何らかの仕事で、何かを求めて、北方に赴くならば、
 その方向にあるところの諸星宿が、汝らを守護せんことを。
139. ダニシュターとシャタビシャーと、二つのバドラパダー²⁰⁸と、
 レーヴァティーとアシュヴィニー、そして、バラニー²⁰⁹が第七なり。
140. 以上²¹⁰、これらの七星宿は、世間の保護者として名声を馳せ、
 北方に住すると説かれたり。それらが汝らを、万事において守護せんことを。
- 338 141. それらの主君なる王は、ナラヴァーハナ²¹¹なるクヴェーラ²¹²（多聞天）にして、
 一切の夜叉の主なり。[彼が] マーニバドラ²¹³（宝賢）と共に[汝らを] 守護せんことを。
- 142²¹⁴. また彼には多くの息子ありて、[みな] 同じ名前で、聡明なり。
 インドラと名づけ、総勢91名にして、大力を有する。
 彼らもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
143. 北方の領域に八名の天の童女あり。[即ち] イラーデーヴィー、
 スラーデーヴィー、プリトゥヴィー、また、パドマーヴァティー、
144. [また] 大王（大天王）に仕えるアーシャー、シュラッダー、ヒリー、シリー²¹⁵なり。
 彼女らも、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
- 145²¹⁶. 北方の領域に、ガンダマーダナ²¹⁷山（香醉山）あり。
 夜叉と精霊たちの住處にして、輝く峰は壮麗なり。
 それもまた、汝らを、無病と幸福とを以て守護せんことを。
146. [その] 方角において汝らに平安あれ。汝らに災厄の来ることなかれ。
 一切の天神に保護されて、諸々の財物を獲得して戻り来たれ。

²⁰⁶ この偈も3行で一偈を成している。

²⁰⁷ *astamga* は、諸写本や諸刊本によれば *aṣṭamga* とすべきであるが、Śāntibhikṣu Śāstri (Lalitavistara, 1984, p.732, fn.24) に *aṣṭamga* = *astamga* とあるので、*astamga* と校訂する。*astamga* とは「asta に沈む」の意であり、asta とは「日月がその背後に没するという神話上の西方の山」である（『梵和大辞典』参照）。

²⁰⁸ 「二つのバドラパダー」(dvāu bhadrapade) のチベット訳は「前バドラパダー (pūrva-bhadrapadā) と後バドラパダー (uttara-bhadrapadā)」という意味の訳文になっている。pūrva-bhadrapadā と uttara-bhadrapadā はいずれも「二十八宿」の一つであり、前者は「室宿」、後者は「壁宿」と漢訳される（『佛教大辞典』4039頁「二十八宿」参照）。

²⁰⁹ これらの星宿名の原語は、順次 dhanīṣṭhā, śatabhiṣā, (pūrva- & uttara-)bhadrapadā, revatī, āsvini, bharanī である。

²¹⁰ チベット訳には「以上」(iti) に当たる訳語はない。

²¹¹ 「ナラヴァーハナ」(naravāhana) とは「人によって運ばれる者：人に乗る者」の意である。『梵和大辞典』には「人によって曳かれた」と訳されている。

²¹² *kuvera* は、この文脈では、北方の世界守護者である「毘沙門天（多聞天）」と同一視される。

²¹³ *māṇibhadra* は「宝珠の賢善なる（美しき宝珠を有する）」の意であり、「クヴェーラ神の兄弟にして夜叉王の名」とされる。

²¹⁴ この偈も3行で一偈を成している。

²¹⁵ これらの童女名の原語は、順次 ilādevī, surādevī, pṛthvī, padmāvatī, āśā, śraddhā, hiri, śiri である。

²¹⁶ この偈も3行で一偈を成している。

²¹⁷ *gandhamādana* は「芳香ある森林を有する山脈の名」であり、「香山」あるいは「香醉山」と漢訳される（『梵和大辞典』参照）。

147. 二十八の星宿ありて、四方にそれぞれ七宿ずつあり。
三十二名の天の乙女ありて、四方にそれぞれ八名ずつあり。
148. 八名の沙門しほもんと〔八名の²¹⁸〕婆羅門ばらもん、八城国の人民と、
インドラを含む八名の天神たち²¹⁹、彼らが汝らを万事に守護せんことを。
- 340 149. 汝らが出立しゅったつするときにも幸いあれ。戻り来たるときにも幸いあれ。
〔汝らが〕親族衆に会っても幸いあれ。親族衆が〔汝らに〕会っても幸いあれ。
150. インドラ天を含む夜叉や大〔天〕王たちと、阿羅漢あらかんたちの哀愍あいみんを受け、
〔汝らが〕いずこへ行くにも幸いありて、吉祥なる甘露かんろを得んことを。
151. ブラフマン（梵天）やヴァーサヴァ²²⁰（インドラ天）、
心解脱者しんげだつしゃや、また、無漏者むろうしやたち、
ナーガ（竜）衆や夜叉衆に常に保護されて、
百秋²²¹に等しき寿命を保たんことを。
152. 無比なる善導師、世間の保護者（如来）は、
彼ら（商人）たちに吉祥なる呪願の偈を説きたまえり。
「汝らは、この善業²²²の故に、マドゥサンバヴァ²²³と名づける
勝者しょうしや（仏陀）に成るべし」〔と〕。
153. これが、世間の善導師なる勝者ぜんどうし（釈迦如来）による、
最初の、障礙しょうがいなき授記じゅきなり。
その後、無数の、多くの菩薩たちが
菩提（悟り）に²²⁴授記せられて、退転たいてんすることなし。
154. 勝者（釈迦如来）からの、この授記を聞いて、
心に歓喜し、最高の喜びを以て、
- 342 彼ら二商人は、かの仲間の者たちと共に、
仏陀と法とに帰命したり、と〔言われる〕。

〔以上〕「トラプシャ・バツリカ品」と名づける第24章なり。

²¹⁸ 原文には「八名の」(aṣṭau) が挿入されているが、韻律によれば、これを削除すべきである。

²¹⁹ 「八沙門」「八婆羅門」「八城国」のいずれも具体的内容は不明であるが、「インドラ等の八天神」は「八方天（はっぽうてん）」を示唆するものと考えられる。八方天とは「東方の帝釈天（インドラ）、東南方の火天、南方の焰魔天、西南方の羅刹天、西方の水天、西北方の風天、北方の毘沙門天、東北方の伊舍那天」をいう（『佛教語大辞典』1110頁参照）。

²²⁰ vāsava とは「Vasu 神群（善良にして光輝ある神々）の長である Indra」を指す。

²²¹ 「百秋」とは「千秋」と同じく「非常に長い年月」を意味する。「秋」（śarad）には「年」の意味もある。

²²² 「下巻」には「前業」と誤記したので、「善業」に訂正する。

²²³ madhusaṃbhava は「蜜から産み出された」の意であるが、方広には「末度三幡佛」と音訳されている。

²²⁴ チベット訳には「菩提に」（bodhayi）に当たる訳語はない。

第25章（勸請品）²²⁵

344 かくして、実に比丘らよ、如来は、ターラーヤナ²²⁶樹の下に坐して、正等覚を現証したる当初の間、独りで《閑静処に在りて²²⁷》、沈思黙考し、世間への随順に関して²²⁸、かくの如く思念せり。「まことに、われが証得し現等覚したる、この法は甚深なり。寂靜、寂滅、寂然なりて、卓絶し、見がたく、理解しがたく、会得しがたく、思慮の範囲を超越せり。神聖にして、聡明なる学識者のみの知るところなり。すなわち、一切の執着を離れ、深く洞察され、確実に洞察され、《一切の感覚が抑止され、²²⁹》最勝義²³⁰（最高の真理）にして、依處²³¹なし。清浄なる境地にして、執着なく、取著なく、知らしめがたく、言説しがたし。無為（生滅変化せざるもの）にして、六境（色・声・香・味・触・法）を超越せり。妄念なく、妄分別なく、不可説なり。声なく、音なく²³²、言音になしがたし。説示しがたく、恚恨（忿怒）なく、一切の所縁（認識の対象）を超越せり。寂止（精神集中）の道により隔絶せられ、空性の故に不可得なり。渴愛を滅し、貪欲を離れたる、寂靜の涅槃なり。たとえ、われが、これを他の人々に説こうとも、もし彼らが理解せざるとすれば、それは、われを疲倦せしめ、無駄な努力となり、無益な説法となるべし。されば、われはむしろ、懸念することなく、默然として住すべし」[と]。また、その時、これらの偈を唱えたまえり。

1. 甚深、寂靜、無塵、明浄にして、
無為なる甘露の法が、まさしく、われに得られたり。

346 [これを] われが説こうとも、他者は理解せざらん。
されば今、われは沈黙して林中に住すべし。

2. 語音を離れ、言語の道に汚染せられず、
真如にして自然の法なること、虚空の如し。
心と意との動揺から解放せられ、
この上もなき不可思議を超えて、われは了知せり。²³³
3. しかもまた、これなる妙義²³⁴の道理は、
諸の文字によっては悟入すること能わざる²³⁵、聖賢の知識なり。
往昔の勝者（仏陀）に供養を為したる衆生たち、
彼らのみが、この法を聴いて信受せん。

²²⁵ 方広には「大梵天王勸請品」と訳されている。

²²⁶ tārayāna については上註131を参照されたい。

²²⁷ 「閑静処に在りて」(rahogatasya) は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²²⁸ チベット訳は「世間に随順せんがために」という意味の訳文になっている。

²²⁹ 「一切の感覚が抑止され」(sarvaveditanirodhaḥ) は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²³⁰ 「最勝義」(paramārtha) とは「最高にして完全なる真理」の意である。方広には「第一義」と訳されている。

²³¹ 「依處」(ālaya) とは「掴みどころ（明瞭な手がかり）」の意である。

²³² チベット訳には「音なく」(aghoṣa) に当たる訳語はない。

²³³ この一行のチベット訳は「この上もなく摩訶不思議なる至高を了知せり」という意味の訳文になっている。

²³⁴ 「妙義」とは「この上なく奥深い意義」の意である。

²³⁵ この部分は、方広には「孰能悟入其義理（孰〈たれ〉か能く其の義理に悟入せんや）」と訳されている。「悟入」とは「正しく理解すること」である。

4. しかもまた、この世に何らかの法が存在するということなく、
それが存在しないということ、それもまたなし。
因と所作との相續展転を知るところの、その者には、
この世において、有（存在）も無（非存在）も存在せず。
5. 無量なる百千の劫において、われは、
過去の勝者（仏陀）の面前にて修習せり。
されど、我（アートマン）もなく、衆生もなく、生命もなしと
〔認識〕するところの、かの〔無生〕忍²³⁶をわれは悟得せざりき。
- 348 6. 「この世において何も生ずることなく、滅することもなく、
この一切の法は、本来、無我なり」との、
この〔無生〕忍が、われによって悟得せられたる、その時、
ディーパと名づける仏陀（燃燈仏）はわれに授記したまえり。
7. 一切世間に対する、われの悲愍心は無辺なり。
他者から勧請²³⁷せられるならば、われは躊躇せず。
しかも、これなる民衆は、ブラフマン（梵天）を淨信せり。
彼に勧請せられるならば、〔われは〕法輪を転ずべし。
8. もしブラフマンが、わが足元に平伏して、
「善良なる性質の、理解力ある衆生あり。
無塵なる上妙の法を説きたまえ」と懇願すれば、
それによって²³⁸、この、わが法を受け取ることを得ん。

かくして、実に比丘らよ、如来は、その時、眉間の〔白〕毫相より光線を発したり。その光線によって、この三千大千世界は広大なる金色の²³⁹光明に満たされたり。

その時、実に、〔十の²⁴⁰〕三千大千世界の主なるシキン²⁴¹大梵天は、仏陀の威神力により如来の心の所念を心で察知して、「意気薄弱の故に、世尊の心は説法に向かわず」と²⁴²〔知り²⁴³〕、彼はかく
350 の如く思念せり。「われは行きて、如来に、法輪を転じたまえと勧請すべし」〔と〕。

また実に、シキン大²⁴⁴梵天は、その時、その他の梵衆天（梵身天）の天子たち²⁴⁵に呼びかけたり。

²³⁶「無生忍」とは「何ものも生じないと認め〔一切は不生不滅であると忍可して〕心を安んずること」であり、「無生法忍」ともいう。方広には「未得究竟無生忍（未だ無生忍を究竟することを得ざりき）」と訳されている。

²³⁷「勧請」とは「仏陀に対して説法を勧め請うこと」である。

²³⁸「下巻」には「斯くて」と訳したが、文意を明瞭ならしめるために「それによって」に訂正する。

²³⁹チベット訳には「金色の」(suvarṇavarṇa)に当たる訳語はない。

²⁴⁰諸校訂本には「十の」(daśa)が付加されているが、諸写本には見られず、チベット訳にもこれに当たる訳語がなく、文脈上も不要である。

²⁴¹「シキン」(Sikhin)は「髻（もとどり）を有する」の意であり、方広には「螺髻梵王」と訳されている。「螺髻（らけい）」とは「ほらがいのように束ねた髻」である。「色界の初禪天に梵衆天と梵輔天と大梵天という三天があり、その大梵天の主は初禪天の王であるので梵天王と称し、尸棄（Sikhin）と名づける」（『佛教語大辞典』929頁「大梵天王」の項目参照）。

²⁴²チベット訳は「世尊は〔説法への〕無関心に心向け、法を説かざるを〔知り〕」という意味の訳文になっている。

²⁴³チベット訳には「知り」に相当する訳語 (ses nas) がある。

²⁴⁴チベット訳には「大」(mahā)に当たる訳語はない。

²⁴⁵「その他の梵衆天の天子たち」の部分、方広には単に「諸梵衆」と訳されている。

「諸君、まことに、この世界は滅し亡ぶべし²⁴⁶。もしも、如来が無上正等覚²⁴⁷を証得したまえるも、
実に、意気薄弱の故に心を説法に向けたまわざるとすれば。さればいざ、われらは行きて、如来・
阿羅漢・正等覚者に、法輪を転じたまえと勧請すべし」[と]。

その時、実に比丘らよ、シキン大梵天は六百八十万の梵天衆に圍繞され、随従せられて、如来の
在すところへと近づき来たりて、如来の足元に頭面をつけて敬礼し、合掌して、如来にかくの如く
言えり。「まことに、世尊よ、この世界は滅すべし。あわれにも、世尊よ、この世界は亡ぶべし。
もしも、如来が無上正等覚を証得したまえるも、実に、意気薄弱の故に、心を説法に向けたまわざ
るとすれば。それ故に、世尊は法を説きたまえ。善逝は法を説きたまえ。善良なる性質にして教化
しやすく、世尊の所説の意味を理解することができる、有能にして優秀なる衆生たちが存在するが
故に」[と]。また、その時、かくの如き偈を唱えたり。

9. 最勝なる大智のマンダラ（円輪）を具備し、

また、まさに、十方に光明を放射して、

352 正智の光線により、人なる蓮華を開花せしめる、²⁴⁸

論者の太陽なる者よ。何ゆえ、今、無関心にて住したまうや。

10. [すでに] 諸の衆生に聖なる財宝を施し、

幾拘胝もの生類を慰安せしめたまいしに、

[その後²⁴⁹] 黙然として衆生を見捨てたまうこと、

これは、世間の親族たる者よ、御身にふさわしからず。

11. 至高なる法の太鼓を打ち鳴らしたまえ。

また、正法の螺貝を、速やかに吹きたまえ。

高大なる法の祭柱を立てたまえ。

巨大なる法の松明を燃やしたまえ。

12. 勝妙なる法水の雨を降らせたまえ。

これら、有（生死）の海に溺れたる者たちを渡らせたまえ。

これら、大病に逼悩せられたる者たちを平癒させたまえ。

煩惱の火に焼かれたる者たちを清涼ならしめたまえ。

13. 平安かつ幸福にして、熱悩なく憂愁なき、

寂靜の道を、いざ、御身は説きたまえ。

涅槃の道に行かざるが故に庇護者なく、

悪道に迷える者たちに、庇護者よ、²⁵⁰ 悲愍を垂れたまえ。

14. 解脱に導く諸の門を開きたまえ。

かの、動揺することなき法理²⁵¹を宣説したまえ。

²⁴⁶チベット訳は「あわれにも、この世間は滅すべし。諸君、まことに、この世間は亡ぶべし」という意味の訳文になっている。

²⁴⁷「無上正等覚」(samyak-sambodhi) は、方広には「阿耨多羅三藐三菩提」と訳されている。

²⁴⁸この一行は、方広には「當以慧日 開於人花（當に慧日を以て 人花を開くべし）」と訳されている。

²⁴⁹チベット訳には「その後」に相当する訳語 (gañ slad) がある。

²⁵⁰「下巻」には「庇護者（御身）」と訳したが、「庇護者よ、」に訂正する。

²⁵¹「法理」(dharma-naya) とは「正法の道理」の意である。方広には「眞實法」と訳されている。

354 庇護者よ、生来^{せいらい}盲目に生まれたる衆生^{しゅじやう}²⁵²の
法眼^{ほうげん}²⁵³を、御身は^{ごみ}²⁵⁴、最高に明浄ならしめたまえ。

15. 梵天界にも、また、天界にも、
夜叉・乾闥婆・人間の世界にも、
世間の生・老を滅除しうるところの、
かような者は、人中の月たる御身以外には存在せず。

16. 法王なる者よ、一切の天神衆を仲間となして、
われは、御身に〔説法を〕勧請したり。
この福德を以て、われもまた、速やかに、
最勝なる法輪を転じる者とならんことを。

比丘らよ、如来は、默然^{もくねん}として、シキン大梵天に同意したまえり。天・人・阿修羅を含む〔全〕
世界を哀愍するが故を以て〔衆生を〕饒益せんがために。

それから、実にシキン大梵天は、如来が默然として同意したるを知って、天界の梅檀香末とアゲル²⁵⁵（沈水香）の香末を如来に注ぎかけたるのち、歡喜と喜悅の心を生じて、まさにそこにて隠没せり。

それから、実に比丘らよ、如来の²⁵⁶法に対する世間の崇敬を生ぜしめるために、また、シキン大梵天をして繰り返し《繰り返し²⁵⁷》如来に勧請せしめて〔大梵天の〕善根を増大せしめるために、
356 また、法を甚だ深く尊重するが故に、〔如来は〕再び独りで、閑静処にて沈黙考し、ここに、かくの如き心の思念を生じたまえり。「われの証得したる、この法は、実に甚深なり。緻細かつ精密にして、理解しがたし。会得しがたく、思慮の範囲を超えたり。聡明なる学識者のみの知るところにして、一切世間の心情に相応せず。見がたく、一切の執着を離れ、一切の有為（心の造作）を鎮め、寂止（精神集中）の道により隔絶せられ、空性の故に不可得なり。渴愛を滅し、食欲を離れたる、寂靜の涅槃なり。たとえ、われがこの法を説こうとも、他の人々が理解せざるとすれば、それは、われに極度の悩乱を生ずべし。されば、われはむしろ、ひたすら黙止²⁵⁸して住すべし」〔と〕。

その時、実に比丘らよ、シキン大梵天は、仏陀の威神力により、再び、如来のその心の所念がかくの如くなるを察知し、天主帝釈の居るところに近づき来たりて、天主帝釈にかくの如く言えり。「カウシカ²⁵⁹よ、なにとぞ知られたし。如来・阿羅漢・正等覚者は、意氣薄弱の故に心を説法に向けたまわず。カウシカよ、あわれにも、この世界は滅すべし。カウシカよ、まことに、この世界は亡ぶべし。カウシカよ、あわれにも、この世界は甚大なる無知の闇黒に放置せらるべし。なぜなら、実に、如来・阿羅漢・正等覚者が、意氣薄弱の故に心を説法に向けたまわざるが故に。何ゆえ、わ

²⁵² チベット訳は「これらの衆生」との訳文になっており、「これらの」(de dag) が挿入されている。

²⁵³ 「法眼」(dharma-cakṣus) とは「真理を見る眼」の意である。

²⁵⁴ 「下巻」には、不注意により「御身は」が欠落しているので、訂正して挿入する。

²⁵⁵ チベット訳 [a ga ru] によれば梵語も agaru であるべきであるが、確認できる全写本において aguru と書かれている。

²⁵⁶ 「如来の」(tathāgatasya) のチベット訳は「如来は」(de bshin gśegs pas) となっており、梵文と合わない。

²⁵⁷ 東大主要写本には、この「繰り返し」(punah) は欠落しているが、Tib[yañ dañ yañ du] によれば、punah を反復するのが適当である。

²⁵⁸ 「黙止」とは「無言のままにしていること」である。

²⁵⁹ kauśika (橋戸迦) は「帝釈天が人間であった時の姓」である（『佛教語大辞典』239頁「橋戸迦」の項目参照）。

れらは、如来・阿羅漢・正等覺者に転法輪を勧請すべく行かざるべきや。それは何ゆえか。実に如来は、勧請せられずしては、法輪を転ずることなければなり」[と]。「善きかな、友よ」とて、帝釈、
 358 梵天、また、大地[の神々]と中空の神々、四大王天、三十三天、夜摩天、兜率天、化乐天、他化自在天、梵衆天、遍光天²⁶⁰、広果天²⁶¹、遍浄天²⁶²、及び、幾百千もの浄居天の天子にして超絶なる色相を有する者たちが、夜更けに²⁶³、ターラーヤナ樹の根元だけを、天界の色相と天界の光輝とを以て照らしながら、如来の在すところへと近づき来たりて、如来の足元に頭面をつけて敬礼し、右邊をなしてから、一方に立てり。

その時、実に天主帝釈は、如来の方向に向かって合掌し、偈を以て如来を讃歎せり。

17. 御身の心の解放せられたること、

実に、蝕より解放せられたる満月の如し。

起ちたまえ。戦闘に勝利せる者よ。

闇黒なる世界に、智慧の光明を灯したまえ。

かくの如く言われたるも、如来はただ沈黙して坐したまえり。

その時、実にシキン大梵天は、天主帝釈にかくの如く言えり。「カウシカよ、如来・阿羅漢・正等覺者たちは、貴君が勧請するが如くには、転法輪を勧請せらるべきにあらず」[と]。

そして、その時、シキン大梵天は偏袒右肩²⁶⁴して、右の膝輪を地に着け、如来の方向に向かい合掌して、偈を以て如来に呼びかけたり。

360 18. 起ちたまえ。戦闘に勝利せる者よ。

闇黒なる世界に、智慧の光明を灯したまえ。

正しく理解するであろう者たちが存在するが故に、

牟尼よ、御身は法を説きたまえ。

比丘らよ、かくの如く言われて、如来はシキン大梵天に、かくの如く告げたまえり。「【大²⁶⁵】梵天よ、われの証得したる、この法は、実に甚深なり。繊細かつ精密にして、等々[前述と同文の途中は省略して]、乃至、それはわれに極度の悩乱を生ずべし。さらにまた、梵天よ、われには、これら[二つ]の偈が常に顕現せり。

19²⁶⁶ わが道は、[世間とは]逆向きに流れ²⁶⁷、甚深にして見がたし。

欲情²⁶⁸に目の眩める者たちは、それを能く見ることなし。故に、説くことは不要なり。

20. 衆生は愛欲に墮落し、[欲望の]流れに随って押し流される。

²⁶⁰「遍光天」は「光音天」とも呼ばれる（第19巻第2号の拙訳[註140]参照）。なお、「下巻」には「偏光天」と誤記したので「遍光天」に訂正する。

²⁶¹「広果天」は「色界の第四禪天に属する八天のうちの第三天の名」である（『佛教語大辞典』399頁「廣果天」参照）。

²⁶²「遍浄天」は「色界の第三禪天に属する三天のうちの第三天の名」である。

²⁶³ atikrāntāyām rātrau は、方広には「於夜分中」と訳されており、チベット訳[nam sros pa]は『藏漢大辞典』によれば「天黒、日暮、天色向晩」の意である。これらを参考に、ここでは「夜更けに」と訳す。

²⁶⁴「偏袒右肩」とは「左の肩にのみ上衣をかける動作」をいう。

²⁶⁵ チベット訳には「大」(mahā)に当たる訳語はないから、削除すべきか。

²⁶⁶ 本偈はチベット訳では韻文訳になっていないが、これはチベット訳者の誤解によるものと思われる。

²⁶⁷ この部分は方広には「逆流道」と訳されている。

²⁶⁸「下巻」には「食欲」と訳したが、「欲情」に訂正する。

われは、これ〔なる法〕を苦難の末に²⁶⁹獲得したり。故に、説くことは不要なり。

その時、実に比丘らよ、シキン大梵天と天主帝釈は、如来が黙然として住したまえるを知って、かの天子衆とともに、苦悩し落胆して、まさに、そこに隠没せり。

三回〔の勧請〕に至るまで、如来の心は、同様に²⁷⁰、意気薄弱に傾きたり。

その時、実にまた比丘らよ、マガダ国の人々に、これらの、不吉にして不善なる、かくの如き類の邪見が生じたり。すなわち次の如し。ある者たちは、かく言えり。「風は吹くことなからん」〔と〕。

362 ある者たちは、かく言えり。「火は燃ゆることなからん」〔と〕。ある者たちは言えり。「天は雨を降らすことなからん²⁷¹」〔と〕。ある者たちは言えり。「河は流れることなからん」〔と〕。ある者たちは言えり。「穀物は育つことなからん」〔と〕。ある者たちは言えり。「鳥は空を飛ぶことなからん」〔と〕。ある者たちは言えり。「妊婦は無病であっても出産することなからん」〔と〕。

その時、実に比丘らよ、シキン大梵天は、如来のその心の所念がかくの如くなるを察知し、またマガダ国の人民の、これらの邪見を知って、夜更けに、超絶なる色相と天界の光輝とを以て、ターラーヤナ樹の根元を遍く照らして、如来の在すところへと近づき来たりて、如来の足元に頭面をつけて敬礼し、偏袒右肩して、右の膝輪を地に着け、如来の方に向かい合掌して、如来に偈を以て呼びかけたり。

21. マガダ国においては、かつて、不浄の法ありき。

穢れをもって考量せられたる言説が生じたり。

それ故に、牟尼よ、甘露（不死）の門を開きたまえ。

無垢なる仏陀の〔広大な²⁷²〕法を、〔人々は〕聴聞するならん。

22. 御身は自己の目的を達成し、自立者と成り、

苦を造作する²⁷³垢穢を滅除したり。

364 御身の善は、減ずることも増すこともなく、

御身は、今や、最勝なる法の彼岸に達したり。

23. 牟尼よ、御身に匹敵する者は、この世界に存在せず。

大仙よ、御身に勝る者の、この世のいづくにやあらん。

御身は²⁷⁴、この三界における最善者にして²⁷⁵、光り輝きつつ、

阿修羅の地に聳ゆる、かの²⁷⁶山（須弥山）の如し²⁷⁷。

24. 苦悩せる衆生に、広大な悲愍を垂れたまえ。

御身の如き者にして冷淡なるは全くふさわしからず。

²⁶⁹『下巻』には「大いなる労苦を以て」と訳したが、「苦難の末に」に訂正する。

²⁷⁰チベット訳には「同様に」(evam)に当たる訳語はない。

²⁷¹チベット訳は「雨は降ることなからん」という意味の訳文になっている。

²⁷²「広大な」(vipula)はチベット訳に相当訳語がなく、韻律上も余計であるから削除すべきである。

²⁷³『下巻』には「苦の所作たる」と訳したが、「苦を造作する」に訂正する。「造作」とは「造り出すこと」である。

²⁷⁴チベット訳には「御身は」(bhavān)に当たる訳語はない。

²⁷⁵チベット訳には「最善者にして」(agras)に当たる訳語はない。

²⁷⁶チベット訳には「かの」(asau)に当たる訳語はない。

²⁷⁷「かの山の如し」は、方広には「如須彌山」と訳されている。

御身は無所畏^{むしよゐ}²⁷⁸の諸力^{しよりき}を具有すれば、
御身こそは、衆生を済度すべき者なり。

25. 天界を含み、沙門と婆羅門とを含む、
この全ての生類は、久しく〔苦悩の〕矢に刺されたり。
〔生類の〕苦痛と熱悩^{ねつのう}とを鎮め、健康にならしめたまえ。
この世に、その〔生類の〕庇護者は〔御身の〕他^{ほか}に存在せず。
26. 浄善^{じょうぜん}なる心を有し、かつ、甘露^{かんろ}（不死）を願い求める
天神や人間たちは、久しく御身に随^{ずい}逐^{ちく}せり。
「勝者は、必ずや、かの〔至上の〕法を証得し、
あるがままに、多々、宣説^{せんせつ}したまわん」〔と考えて〕。
27. それ故に、剛勇^{こうゆう}なる者よ、〔われは〕御身に懇願す。
久しく道に迷える衆生を導きたまえ。
〔未だ〕妙義^{みょうぎ}を聴かざる者たちが聴聞^{かづぶん}を渴望すること、
極度に羸瘦^{るいそう}せる者たちが肥壮^{ひそう}たらんと渴望するが如し。
28. 《偉大なる牟尼よ、これらの生類は渴きに苦しめられ、
御身の前にて、法の水を待望せり²⁷⁹》。
枯渴せる大地を雨雲^{あまぐも}がうのおすが如く、
導師たる者よ、法雨^{ほうう}を以て快復せしめたまえ。
29. 久しく道に迷える民衆は、生存において、
棘^{いばら}の茂る邪見^{じゃけん}の密林^{ほうこう}を彷徨せり。
修習^{しゅうじゅう}すれば甘露^{かんろ}（不死）を得るに至るところの、
《かの²⁸⁰》棘なき正真の道を説きたまえ。
30. 闇黒なる深坑^{しんこう}に落ちて、導師を有することなき、
この世の、この者たちは、余人の能く拯濟^{じょうき}²⁸¹するところにあらず。
御身こそは覚知ある牡牛なれば、志願^{しがん}を起こして²⁸²、
大深坑^{だいしんこう}に落ちたる者たちを引き上げたまえ。
31. 牟尼よ、御身（仏陀）には久しく値遇^{ちぐう}しがたきを常とする。
偶々ある時、ウドゥンバラ²⁸³の花の咲くが如く、
導師たる勝者（仏陀）たちは〔ごく稀に〕地上に出現する。
庇護者よ、〔今こそ〕無暇處^{むかしょ}に生じたる衆生^{げだつ}を解脱せしめたまえ。
32. しかも前生において、御身に、この決意ありき。

²⁷⁸「〔四〕無所畏（四無畏）」については第19巻第1号所載の拙訳（註37）を参照されたい。

²⁷⁹《 》内の部分は写本 T5を除く東大主要写本に欠落しており、チベット訳にもこれに相当する訳文がない。しかし、偈数から見ても文脈上も、この部分が必要である。

²⁸⁰「かの」（tam）は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳 [de] によっても韻律上も必要である。

²⁸¹「拯濟」とは「救い助けること」で、「救済」と同じである。

²⁸²「下巻」には「信喜を生じて」と訳したが、「志願を起こして」に訂正する。

²⁸³udumbara（優曇華）は「三千年に一度だけ花が咲く樹と言われ、また如来が出現し、転輪王が出現すれば花が咲くともいわれ、さらに、花なくして実を結ぶともいわれる。経典の中では稀有なことの譬喩とする」（『佛教語大辞典』92頁「優曇華（うどんげ）」参照）。

「自ら〔彼岸に〕渡りてのち、〔他の衆生をも〕渡らしむべし」〔と〕。

368

今や、御身の彼岸に渡り終えたること必定なり。

真実の勇猛ある者よ、〔かの〕誓約を真実ならしめたまえ。

33. 牟尼よ、法の炬火を以て黒暗を消散せしめたまえ。

何とぞ、御身は、如来の旗印を揚げたまえ。

美妙なる語声を宣揚すべき時が到来したり。

法鼓の音声を有する者よ、獅子の如く吼えたまえ。

その時、実に比丘らよ、如来は、仏眼を以て、世間をあまねく観察し、衆生を見たり。〔その中には〕劣等なる〔者たちや〕、平凡なる〔者たちや〕、優秀なる者たちがあり。高等なる〔者たちや〕、下等なる〔者たちや〕、中等なる者たちがあり。善良なる性質にして浄化しやすい者たち、邪悪なる性質にして浄化しがたき者たち、略説（簡略なる説明）にて理解する者たち、広説（詳細なる説明）にて理解する者たち²⁸⁴、語句に執著する者たち〔など〕があり、〔総じて〕三種の衆生聚あり。ひとつは邪定聚（邪性に定まりたる類聚）、ひとつは正定聚（正性に定まりたる類聚）、ひとつは不定聚（どちらの性にも定まらざる類聚）なり。比丘らよ、あたかも次の如し。《ある人が²⁸⁵》池の岸辺に立って蓮華を見るに、あるものは水の中にあり、あるものは水面上にあり、あるものは水面より上にあり。比丘らよ、それと全く同様に、如来は、仏眼を以て、世界をあまねく観察して、衆生が三種の性聚に定められたるを見たり。

その時、実に比丘らよ、如来はかくの如く思念せり。「われが法を説こうとも、あるいは説かざるとも、凡そ、かの邪定聚〔の者たち〕は、決してこの法を理解することなかるべし。また、われが法を説こうとも、あるいは説かざるとも、かの正定聚なる者たちは、この法を正しく理解すべし。然しながら、実に、かの不定聚なる者たちは、もし、彼らに法を説かば理解すべし。されど、説かざれば理解せざるべし」〔と〕。

370

その時、実に比丘らよ、如来は、不定聚に属する衆生を因由として、大悲心を起こしたまえり。

その時、実に如来は、この、自らの正しい認識によるが故に、シキン大梵天の勧請を了知して、偈を以てシキン大梵天に告げたり。

34. 梵天よ、マガダ国の衆生にして、

常に聞く耳を持ち、浄信ある者となり、

害心を抱くことなくして、法を聴聞する、

その者たちに、甘露（不死）の〔法〕門は開かれたり、と。

その時、実にシキン大梵天は、如来が承諾したまえるを知って、歓喜・踊躍し、喜悅し、満足し、欣快を生じて、如来の足元に頭面をつけて敬礼したるのち、まさに、そこにて隠没せり。

また、実に比丘らよ、大地の神々は、その時、虚空の神々に音声を發して、言葉を告げたり。「諸君、今日、如来・阿羅漢・正等覺者によって、轉法輪の約束がなされたり。それは大衆の利益と成

²⁸⁴ チベット訳には「広説にて理解する者たち」(vipaṇcitajñān) に当たる訳語はない。

²⁸⁵ 「ある人が」(puruṣaḥ) は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳にはこれに相当する訳語 (mi shig) がある。

372 り、大衆の安楽と成り、世間に対する哀愍^{あいみん}と成り、大群衆²⁸⁶の、また天神衆や人間たちの、富と利益と安楽とを生ずべし。まことに、諸君、アスラ（阿修羅）の衆は減失^{げんしつ}し、デーヴァ（天神）の衆は成満^{じょうまん}すべし。また、世間における、多くの衆生が涅槃^{ねはん}することを^う得べし」[と]。かくの如く、実に、虚空の神々は大地の神々より聞いて、四大王天の神々に音声を発したり。四大王天[の神々]は三十三天[の神々]に、三十三天は夜摩天に、夜摩天は兜率天に、兜率天は化樂天に、化樂天は他化自在天[の神々]に²⁸⁷、また、彼らは梵衆天（梵身天）の神々に音声を発し、言葉を告げたり。「諸君、今日、如来・阿羅漢・正等覚者によって、転法輪の約束がなされたり。それは大衆の利益と成り、大衆の安楽と成り、世間に対する哀愍と成り、大群衆の、また天神衆や人間たちの、富と利益と安楽とを生ずべし。まことに、諸君、アスラ（阿修羅）の衆は減失し、デーヴァ（天神）の衆は成満すべし。また、世間における、多くの衆生が涅槃することを得べし」と。

かくして、実に比丘らよ、その刹那^{せつな}、その瞬間^{しゅんかん}、その須臾^{しゅゆ}の間に、かの大地の神々から始まり、梵衆天の神々に至るまで、ひとつの言音、ひとつの音響が²⁸⁸湧き起これり。「諸君、今日、如来・阿羅漢・正等覚者によって、転法輪の約束がなされたり」と《前述の如くなり²⁸⁹》。

その時、実に比丘らよ、ダルマルチ（法光）と名づける菩提樹[を守護する]神あり、また、ダルマカーマ（法愛）とダルママティ（法慧）とダルマチャーリン²⁹⁰（法行）と[名づけるところ]の、
374 これら四名の菩提樹神は、如来の両足に平伏して、かくの如く言えり。「いづこにて、世尊は法輪を転じたまうや」と²⁹¹。比丘らよ、かくの如く言われて、如来は、かの[樹]神たちに、かくの如く言えり。「ヴァーラーナシー²⁹²（ベナレス）の仙人墮處^{せんになだしよくやおん}鹿野苑²⁹³において」[と]。彼らは言えり。世尊よ、ヴァーラーナシーの都城は人民少なく、また、鹿野苑は樹陰^{じゅいん}少なし。世尊よ、^{ほか}他にも大都城ありて、[それらは]繁榮し、富み、平和なり、かつ食物豊饒なりて、歓樂に満ち、衆多の人民を擁し、園林・森林・叢林^{そうりん}に^{えいしよく}瑩飾²⁹⁴せられたり。世尊よ、それらの[都城の]いづれかにおいて、法輪を転じたまわんことを」[と]。如来は告げたり。「賢兄諸氏、かくの如く言うことなかれ。それは何ゆえか。

35. 六万拘胝那由多^{ろくたいなよど}²⁹⁵もの祭式が、そこにおいて、われによって^な為されたり。

六万拘胝那由他もの仏陀が、そこにおいて供養せられたり。

そこには往昔の仙人たちの住處あり、そのヴァーラーナシーの名声は至上なり。

²⁸⁶「大群衆」とは、この場合、「人間以外をも含めた生物の群衆」を指すものと考えられる。

²⁸⁷チベット訳は「四大王天の天神衆は、三十三天と、夜摩天と、兜率天と、化樂天と、他化自在天たちへと」という意味の訳文になっている。

²⁸⁸「ひとつの言音、ひとつの音響が」の部分のチベット訳は、単に「ひとつの言音が」という意味の訳文になっている。

²⁸⁹「前述の如くなり」（pūrvavat）は写本 N4を除く全写本に欠落しているが、チベット訳 [sñā ma bshin du] によれば、これを挿入すべきである。

²⁹⁰以上の四名の菩提樹神名の原語は、順次 dharmaruci, dharmakāma, dharmamati, dharmacārin である。方広には「有四菩提樹天。一名受法。二名光明。三名樂法。四名法行」と訳されている。

²⁹¹チベット訳には「〜と」（iti）に当たる訳語はない。

²⁹²vārāṇasī（波羅奈国）は現在のベナレス（ヴァラナシ）であり、「ガンジス河左岸にヒンドゥー教の聖地が連なり、毎年多くの巡礼者が訪れる」。「広辞苑」（第六版）「ヴァラナシ」の項目参照。

²⁹³「仙人墮處」とは「仙人の落ち合う所。仙人の集まる所。鹿野苑に同じ。ベナレスの郊外のサールナートが、昔このようによばれていた」（『佛教語大辞典』836頁参照）。

²⁹⁴「瑩飾」とは「あざやかに飾ること」である。

²⁹⁵方広には「六十千億那由他」と訳されている。

その地は、天神や竜たちに讃歎せられ、常に、法を趣向する地處なり²⁹⁶。

36. また、われ、往昔の、九万一千拘胝²⁹⁷の仏陀を憶念するに、

彼らは、かの仙人〔墮處〕と名づける至上の森にて、最勝なる〔法〕輪を転じたまえり。

376 しかもまた、〔そこは〕静穩^{せいゑん}にして寂靜なる禪定が現前し、常に鹿たちに近侍^{きんじ}せられたり。

その故に、仙人〔墮處〕と名づける至上の森にて〔われは〕最勝なる〔法〕輪を転ずべし」と。

〔以上〕「勸請品」と名づける第25章なり。

²⁹⁶『下巻』には「法に専念するところなり」と訳したが、「法を趣向する地處なり」に訂正する。

²⁹⁷方広にも「九萬一千拘胝」と訳されている。